

大崎後原遺跡 2

—福岡県小郡市大崎所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第256集

2011

小郡市教育委員会

大崎後原遺跡 2

—福岡県小郡市大崎所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第256集

2011

小郡市教育委員会

序 文

本書は、宅地造成事業に先立って、小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。本遺跡が所在する小郡市大崎地区では、これまでの調査で弥生時代から中世に至るまで多くの遺跡が存在することが知られています。

ここに報告いたします「大崎後原遺跡 2」では、弥生時代中期後半から末頃にかけての井戸や、土器などが廃棄された溝などの遺構と共に多くの遺物も確認され、良好な資料を得ることができました。

今回得られた成果が今後末永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いです。

最後に、地権者の小牧剛さん、片山浩さん、江越渉さん、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 23 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例 言

1. 本書は、小郡市大崎地内における宅地造成事業に伴って、小郡市教育委員会が平成 21 年度に発掘調査を行った大崎後原遺跡 2 A・2 B・2 C の報告書である。調査期間は、平成 21 年 7 月 6 日から同年 8 月 18 日までである。
2. 整理作業は、平成 22 年度国庫補助事業として実施した。
3. 遺構の実測及び写真撮影は、坂井貴志・田中良輔が実施した。
4. 遺物の復元・実測・製図には、坂井・西江幸子の他に馬田妙子、宮崎美穂子、柳美保幸、衛藤知嘉子、佐々木智子、原野照子、井上千代美、永倉さゆみ、林田和也、長野智恵子ら諸氏に多大なる協力を得た。
5. 遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房に委託した。
6. 本書に記載した遺構略号は、S B：掘立柱建物跡、S K：土坑、S E：井戸、S D：溝、P：ピットである。
7. 遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
8. 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径の残存が 1/6 以下、あるいは、口径の推定が困難なものである。
9. 遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
10. 本書の執筆は、第 1 章・第 2 章・第 3 章 1・2 の遺構、第 4 章 1・2 の遺構、第 5 章 1・2 の遺構を坂井が、第 3 章 2 の遺物、第 4 章 2 の遺物、第 5 章 2 の遺物、第 6 章を西江が担当し、編集は坂井・西江が担当した。

本文目次

第1章 調査の経過と組織・・・・・・・・・・・・・1	第5章 大崎後原遺跡2C区の調査・・・・・・・・・・・・・15
第2章 位置と環境・・・・・・・・・・・・・2	1 調査の概要
第3章 大崎後原遺跡2A区の調査・・・・・・・・・・・・・5	2 遺構と遺物
1 調査の概要	第6章 まとめ・・・・・・・・・・・・・27
2 遺構と遺物	1 各遺構の時期と大崎後原遺跡の広がりについて
第4章 大崎後原遺跡2B区の調査・・・・・・・・・・・・・13	2 小郡市中・南部における弥生時代中期の遺跡動向
1 調査の概要	
2 遺構と遺物	

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	第14図 2C区SK-1・2実測図 (S=1/40)
第2図 大崎後原遺跡2 調査区位置図 (S=1/5,000)	第15図 2C区SE-1実測図 (S=1/40)
第3図 大崎後原遺跡2 遺構配置図 (S=1/100)	第16図 2C区SD-1実測図 (S=1/40)
第4図 2A区SK-1・3～5実測図 (S=1/40)	第17図 2C区SD-1上層出土土器実測図① (S=1/4)
第5図 2A区SE-1～3実測図 (S=1/40)	第18図 2C区SD-1上層出土土器実測図② (S=1/4)
第6図 2A区SK-2、SD-1実測図 (S=1/40)	第19図 2C区SD-1中・下層出土土器実測図① (S=1/4)
第7図 2A区SK-1・3、SE-1・2、SD-1 出土土器実測図 (S=1/4)	第20図 2C区SD-1中・下層出土土器実測図② (S=1/4)
第8図 2A区SE-2出土木製品実測図 (1 : S=1/4、2・3 : S=1/6)	第21図 2C区SD-1中・下層出土土器実測図③ (S=1/4)
第9図 2A区SE-2出土編組品実測図 (S=1/1)	第22図 2C区SD-1中・下層出土土器実測図④ (S=1/4)
第10図 2B区SK-1実測図 (S=1/40)	第23図 2C区SD-1出土石器実測図 (1 : S=1/2、2・3 : S=1/4)
第11図 2B区SD-1出土土器実測図 (S=1/4)	第24図 小郡市中・南部の弥生時代中期の遺跡分布
第12図 2B区SD-1実測図 (S=1/40)	第25図 小郡市中・南部の須玖I式段階の遺跡分布
第13図 2C区SB-1実測図 (S=1/40)	第26図 小郡市中・南部の須玖II式段階の遺跡分布

表目次

表1 大崎後原遺跡2 出土土器観察表	表3 大崎後原遺跡2 出土木製品観察表
表2 大崎後原遺跡2 出土石器観察表	

図版目次

図版1 2A区遺構写真 (全景、SK-1土層、SK-1完掘、SK-2土層・完掘、SK-3完掘)	図版5 2C区遺構写真 (全景、SB-1P1土層、SB-1P2土層、SB-1P3土層、SB-1P4土層)
図版2 2A区遺構写真 (SK-4土層、SK-4完掘、SK-5土層、SK-5完掘、SE-1土層、SE-1完掘、SE-2土層、SE-2完掘)	図版6 2C区遺構写真 (SB-1P5土層、SB-1P6土層、SB-1P7土層、SB-1全景、SK-1完掘、SK-2土層、SK-2完掘、SE-1土層・完掘)
図版3 2A区遺構写真 (SE-2下層・建築材、SE-3土層、SD-1土層、SD-1完掘)	図版7 2C区遺構写真 (SD-1A-A'土層、SD-1B-B'土層、SD-1全景)
図版4 2B区遺構写真 (全景、SD-1A-A'土層、SD-1B-B'土層、SD-1C-C'土層、SD-1完掘)	図版8 2A区出土土器・木器・編組品
	図版9 2B区出土土器、2C区出土土器
	図版10 2C区出土土器
	図版11 2C区出土土器・石器

第1章 調査の経過と組織

大崎後原遺跡2の調査は、宅地造成事業に先立ち、平成19年10月24日付で小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無について照会があったことを端緒とする(審査番号7087)。市教委では、これを受けて平成19年11月9日に申請地の試掘調査を行った。その結果、申請地ほぼ全域、地表下30cm～95cm下で遺構が確認された。当初は道路造成部分についてのみ開発を行うことで、発掘調査(大崎後原遺跡・平成20年調査)を行っている。

平成21年5月・7月に、宅地部分3箇所についても造成を行うとの申請が上がり、再度協議を行った。結果、建物の基礎部分が遺構面まで達する上、計画変更もできないとのことであったため、3箇所を2A・2B・2C区として発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

調査期間は、平成21年7月6日～7月29日(大崎後原遺跡2A・2B)、同年7月29日～8月18日(大崎後原遺跡2C)である。

〔調査組織〕

平成21年度

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部長 高木 良郎
文化財課 課長 田籠千代太
係長 片岡 宏二
嘱託技師 坂井 貴志
嘱託技師 田中 良輔

(現 彦根市教育委員会)

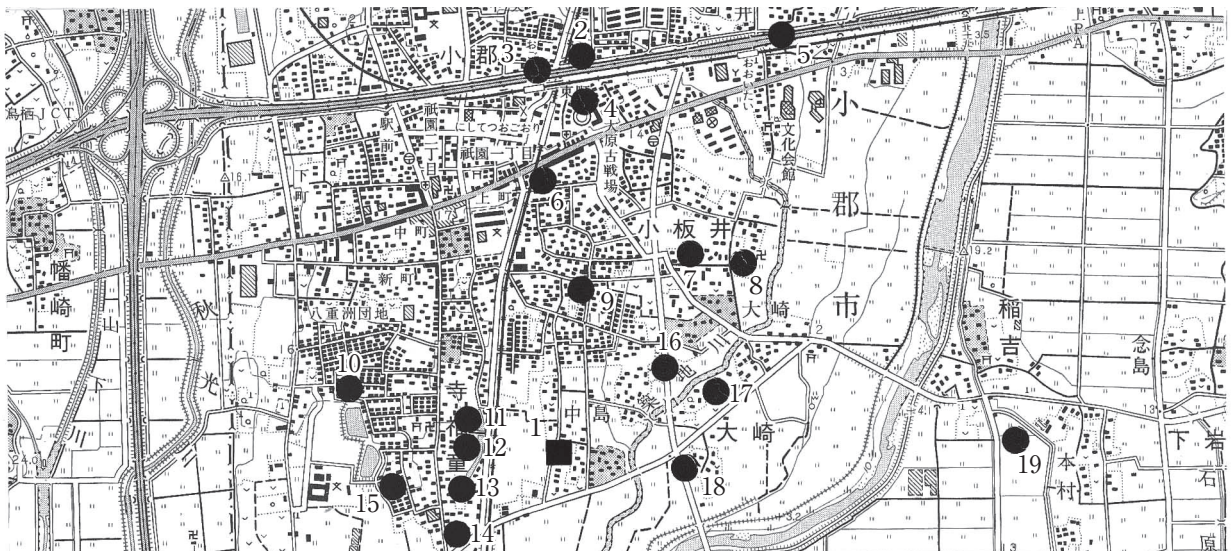
平成22年度

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部長 河原 寿一郎
文化財課 課長 田籠 千代太
係長 片岡 宏二
技師 西江 幸子
嘱託技師 坂井 貴志

〔発掘作業従事者〕

伊東 みさ子、草場 誠子、田中 賢二、土井 久江、中村 国義、山本 絹子、横田 雅江



- | | | | |
|----------------|----------------|-------------|-------------|
| 1. 大崎後原遺跡1・2 | 2. 向築地遺跡 | 3. 小郡前伏遺跡 | 4. 小板井蓮輪遺跡2 |
| 5. 大板井遺跡 | 6. 小板井京塚遺跡 | 7. 小板井蓮輪遺跡 | 8. 小板井屋敷遺跡 |
| 9. 大崎井牟田遺跡 | 10. 寺福童遺跡5 | 11. 寺福童遺跡3 | 12. 寺福童遺跡4 |
| 13. 寺福童内畑下道東遺跡 | 14. 寺福童遺跡 | 15. 寺福童遺跡2 | 16. 大崎小園遺跡 |
| 17. 大崎遺跡 | 18. 大崎中ノ前遺跡1・2 | 19. 稲吉元矢次遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

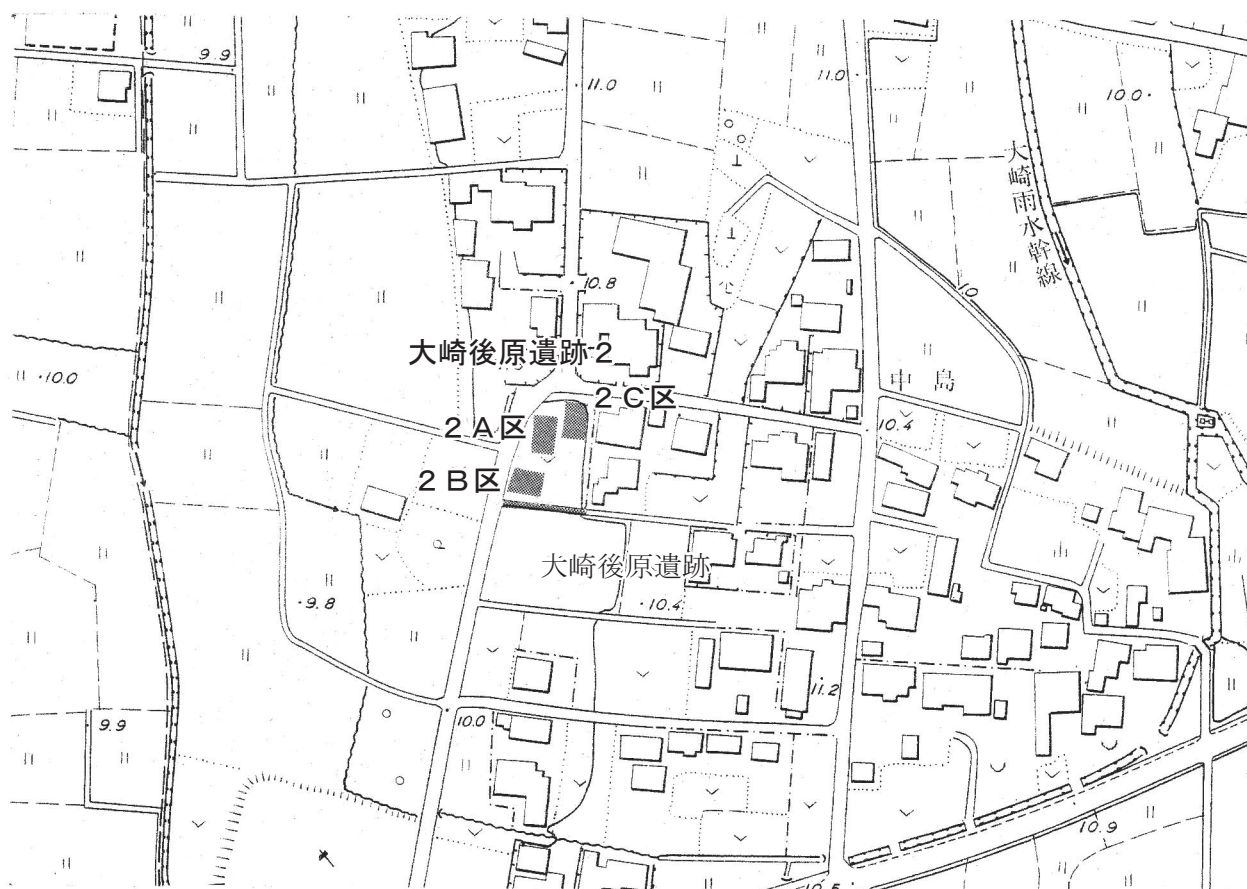
第2章 位置と環境

大崎後原遺跡2は、宝満川の西岸、三国丘陵からなだらかに続く低台地上の縁辺部に位置する。標高は11m前後を測り、西側に広がる水田面から若干高い箇所になる。

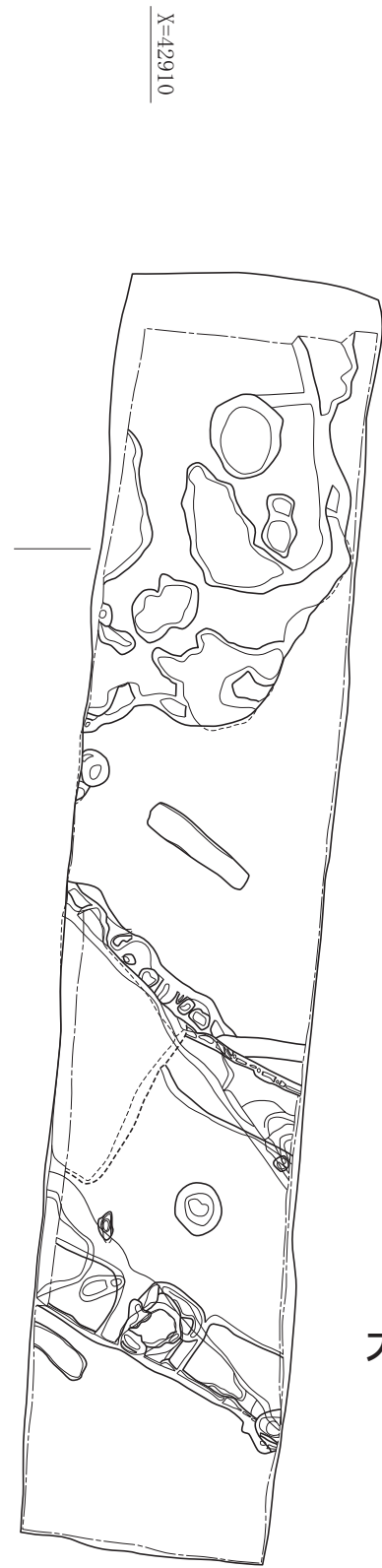
大崎地区周辺には、市内でも主要な遺跡が多数存在している。大崎井牟田遺跡(9)は市内でも希少な縄文時代遺跡の一つで、押型文土器が集石炉に伴って出土している。大崎中ノ前遺跡2(18)は、弥生時代中期前半～後期初頭にかけての集落跡で、竪穴住居や土坑、掘立柱建物が検出された。土坑の幾つかは「貯木土坑」と考えられ、赤・黒漆塗りの木製品や木製鋏が出土している。大崎小園遺跡(16)は古墳時代初頭から後期にわたる集落遺跡で、古墳時代初頭に当たる竪穴住居からは在地形の土器に伴って畿内系の土器が出土している。以上のように、大崎地区では各時代を通じて集落が形成されてきた点が特徴として挙げられる。

当地の西側には南から谷が入り込んでいるが、その谷を挟んだ対岸部分の寺福童地区では、古墳時代初頭の方形周溝墓に代表されるように、墓地・埋葬遺構が多く確認されている。特に寺福童遺跡5地点(10)では、弥生時代早期の木棺墓群、弥生時代中期～後期の甕棺墓・土壇墓、そして古墳時代初頭にかけての石棺墓・方形周溝墓に至るまで、各時期の墓地が連綿と営まれており、墓域としての性格を際立たせている。また寺福童遺跡4地点(12)では、中広形銅戈9本が埋納されたままの状態を検出され、時期によっては「祭域」としての性格も併せ持つ地域であったことがわかる。

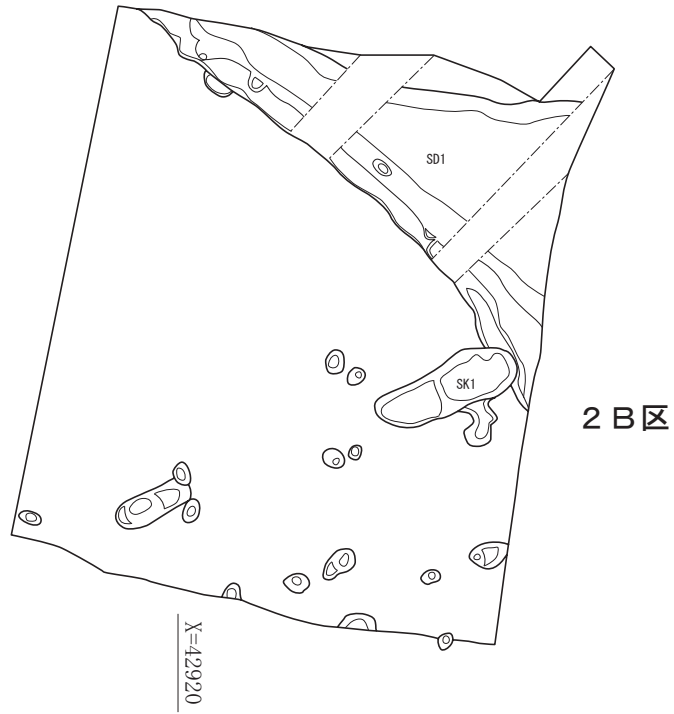
大崎地区では、埋葬遺構のまとまった検出例がなく、逆に対岸の寺福童地区では集落遺構の検出に乏しいことから「集落域」「墓域」という相関関係の存在の可能性がこれまでも指摘されてきた。今後も両地域の遺跡の動向を詳細に解明する必要がある。



第2図 大崎後原遺跡2 調査区位置図 (S=1/5,000)

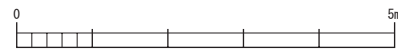


大崎後原遺跡

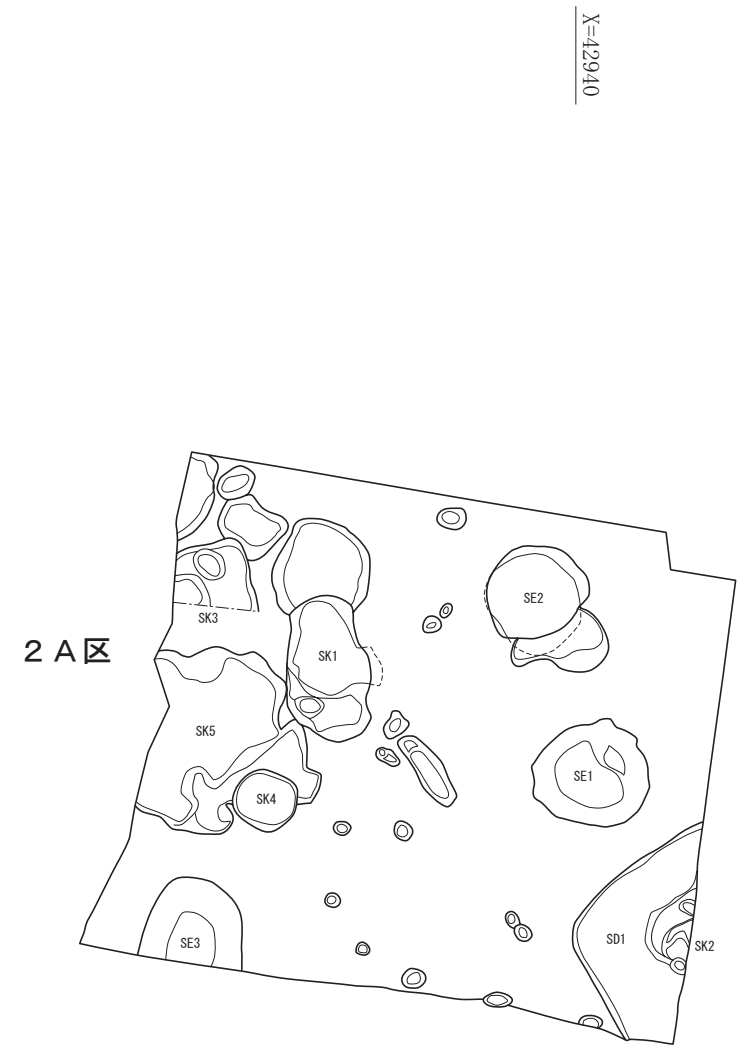


2 B 区

大崎後原遺跡 2



X=42930



2 A 区

Y=-41500



2 C 区

Y=-41490

第 3 図 大崎後原遺跡 2 遺構配置図 (S=1 / 100)

第3章 大崎後原遺跡2A区の調査

1 調査の概要

調査地は、標高11.2m前後、遺構検出面で10.5m前後を測り、緩やかに西に向けて傾斜する。

遺構検出面は淡茶褐色ローム層である。基本層序は造成土、黒褐色土、黒色シルトの包含層、その下で淡茶褐色ロームの地山面となる。さらに掘削していくと黄褐色土・淡黄白色の砂へ変わっていく。

検出した遺構は、土坑5基、井戸3基、溝1条、ピット多数である。

2 遺構と遺物

(1) 土坑【SK】

SK-1 (第4図、図版1)

SK-1は、調査区中央部付近にて検出した1.95m×1.2mの東西に長い楕円形を呈する土坑である。検出面から底面までは約30cmと浅い。

出土遺物

土器 (第7図)

1は口径27.8cmの土師器の甕である。口縁端部は隅丸状を呈し、形成後余った粘土を外側面に伸ばし、ナデたと考えられる痕跡が残存している。外面は縦方向のハケメ、内面は口縁部から頸部にハケメ、胴部にヘラ削りを施している。内外面の口縁部から頸部の一部に、焼成時についたと考えられるススが付着している。2は土師器の甕か甕の把手である。外面は把手に指押さえ、胴部は把手部分に向かって工具状のものでナデ上げている。内面胴部はヘラ削りが施されている。形態的特徴より、古墳時代後期後半～末に相当すると考えられる。

SK-2 (第6図、図版1)

SK-2は調査区北部壁際にて検出した。SD-1を切る。調査区壁に掛かるため詳細は不明であるが、径60cm程度の不整形円形を呈するものであろう。検出面から底面までの深さは30cm程度と浅い。

遺物の出土はない。

SK-3 (第4図、図版1)

SK-3は調査区南部壁際にて検出した。調査区壁・試掘トレンチに掛かるため詳細は不明であるが、不整形円形を呈するものであろうか。

出土遺物

土器 (第7図)

3は口径11.4cmの土師器の甕の口縁部である。口縁部はやや水平に伸び、頸部は逆L字状に屈曲する。外面胴部にハケメ、内面胴部に指押さえを施している。

SK-4 (第4図、図版2)

SK-4は調査区中央付近で検出した、径80cmの円形の土坑である。検出面から底面までの深さは15cmと浅い。

弥生土器小片の出土があったが、図化するに至らなかった。

SK-5 (第4図、図版2)

SK-5は調査区南端部にて検出した。SK-4に切られる。土層観察では自然堆積の様相を示していたが、掘り込みの形状から土坑としたものである。隣接するSK-3と同遺構の可能性が高

い。検出面から底面までの深さは14cm～55cmとばらつきがあり、南に向けて傾斜する。南には同じく調査を行った2B区があり、そこで検出されたSD-1と接続する可能性はあるが、詳細は不明である。

遺物の出土はない。

(2) 井戸【SE】

SE-1 (第5図、図版2)

SE-1は、調査区北部にて検出した素掘りの井戸である。平面形は円形で、径1.45m～1.55mを測り、深さは1.09mの円筒形を呈する。包水層である硬砂層まで掘削されている。中層～下層には遺物が集中して出土する箇所が複数みられ、完形のものも出土していることから祭祀行為によるものと考えられる。

出土遺物

土器 (第7図、図版8)

弥生土器が4点出土している。4は口径18.0cmの甕である。口縁端部は隅丸方形を呈する。内面はほぼ全面にススが付着している。5～7は袋状口縁壺であり、5は最下層から、7は中層から出土している。口縁部は屈曲部分に緩い稜線をもっており、胴部の張りは5が緩く、6・7は強い。3点ともに内面胴部にススが付着し、丹が看守されるが、その様相は個々で異なる。5は非常に残りが悪く、外面において丹が散在してみられる。6は外面全面に丹を塗り、内面は口縁部分にのみ丹が垂れている。7は外面全面に丹を塗り、内面は広範囲にわたって口縁部から胴部にかけて丹が流れおちている。また、7は胴部に破裂痕がみられる。形態的特徴より、弥生時代中期後半～末の須玖Ⅱ式段階のものと考えられる。

SE-2 (第5図、図版2・3)

SE-2は、調査区北部にて検出した素掘りの井戸である。径1.39m～1.22mの円形を呈し、深さは1.26mを測る。SE-1と同じく包水層である硬砂層まで掘削されている。覆土は、1層～3層が「井戸封じ」のための埋土と考えられる。下層にあたる7層以下からは、木器が大量に検出された。また木器の直下からはツル状の繊維を用いた編組品も検出した。

出土遺物

土器 (第7図)

弥生土器が3点出土している。8は口径19.0cmの甕である。口縁端部は丸味を帯び、頸部の屈曲はやや強く、くの字状を呈している。9は底径9.0cmの壺の底部であり、やや凸レンズ状を呈している。10は口径16.8cmの鉢である。口縁部は隅丸方形を呈し、外面胴部には黒斑がみられる。

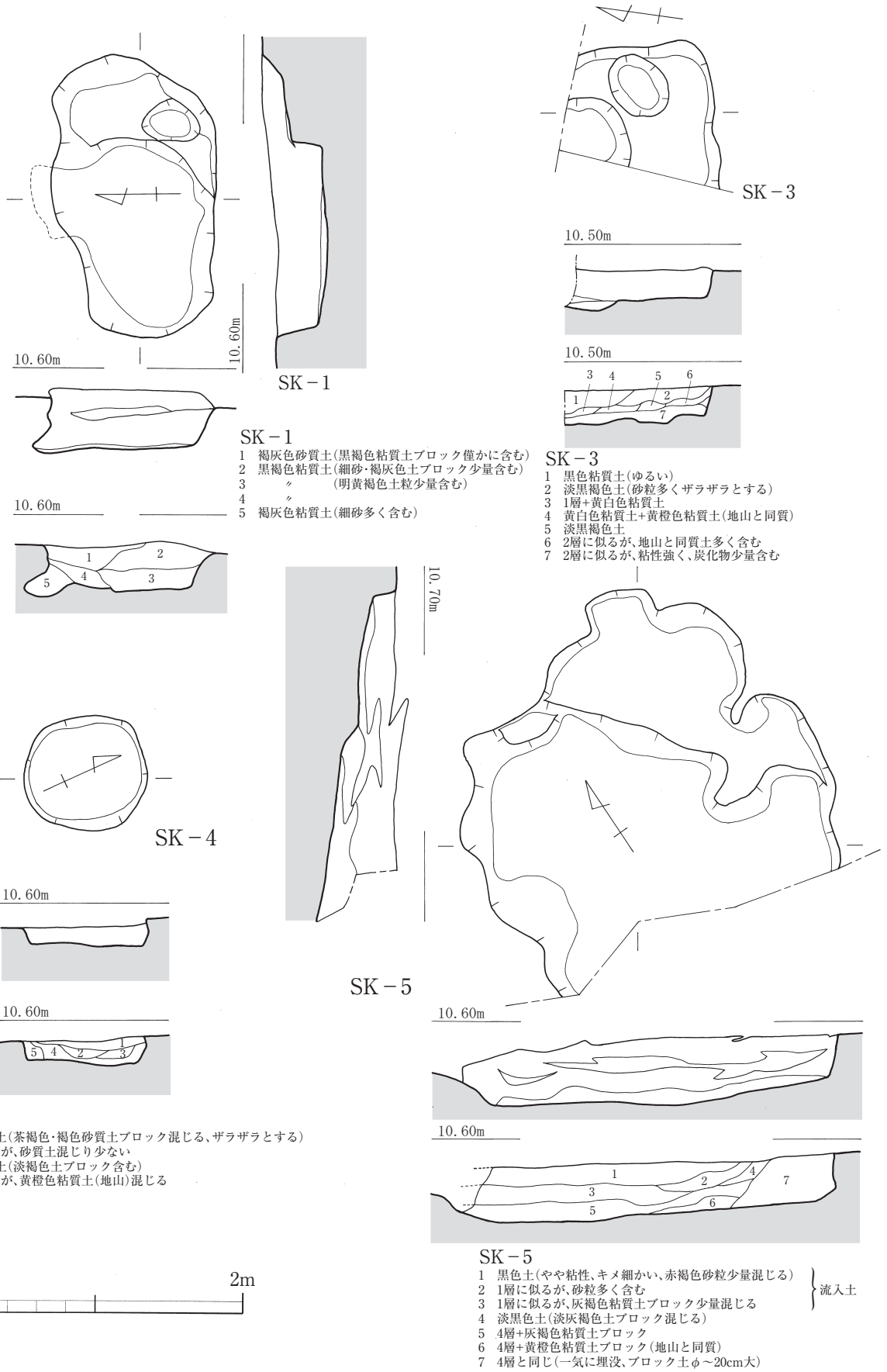
木器 (第8図、図版8)

木器については作図の上、番号を付し極力取り上げた。取り上げ数は16点であり、そのうち代表的な3点のみ実測を行った。

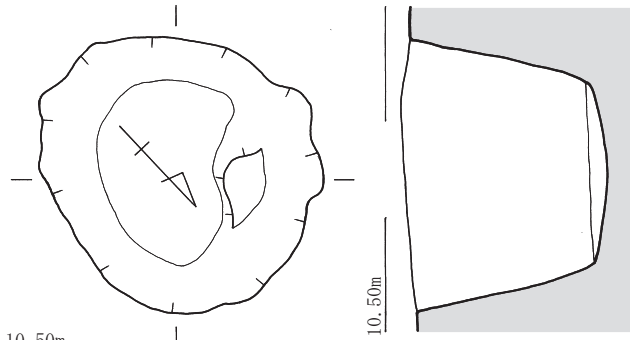
1・2は杭である。1は、先端部分を幅2.5cmほどの加工面で調整しており、杭先を平たく削っている。2は、先端が欠損しているためどのような形態をしていたかは不明である。両端の欠損部付近では、幅3.0cmほどの加工面がみられる。一部焼き焦げがみられることから、焼きしめを行ったと考えられる。3は、蹴放しである。ホゾには挟りがみられる。平坦面ではホゾの角を中心に34cm×7.5cmの幅で一段調整をしたためか低くなっている。また、片面には無数の細かい傷が入っているが、加工傷かどうかは不明である。

編組品 (第9図、図版8)

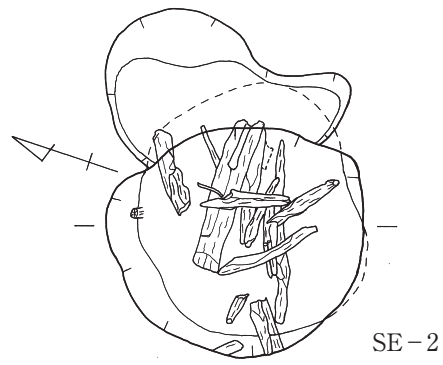
編組品が1点出土している。5cm×7.5cmと破片であるが、カゴ状を成すものと思われ、体部下半から底部にかけて残存する。底部は2本1単位の2本超2本潜1本送の「網代」組みで、体部下半は2本超2本潜1本送を基調とする「飛びごぎ目」組みの技法がみられる。



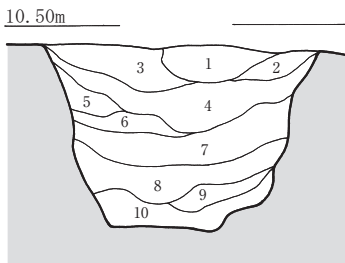
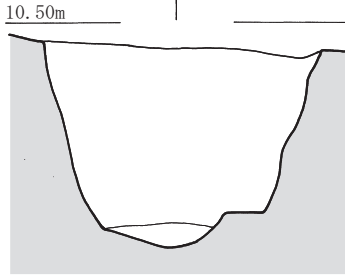
第4図 2A区SK-1・3~5実測図 (S=1/40)



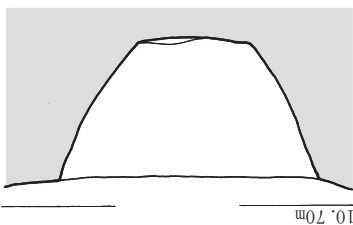
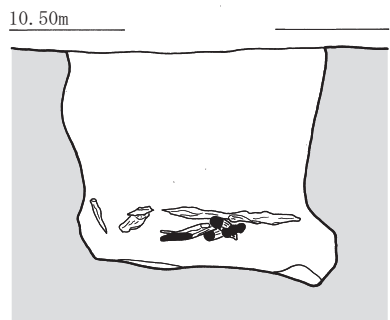
SE-1



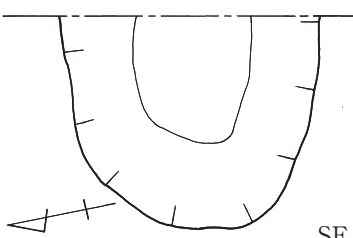
SE-2



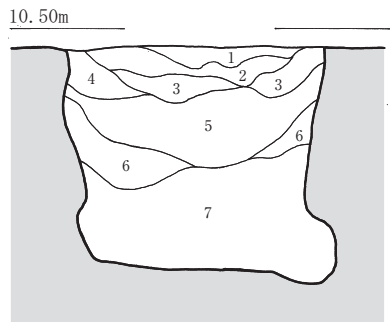
- SE-1
- 1 黄褐色土(砂質、暗褐色土粒多く混じる)
 - 2 黒褐色土(黄褐色土粒少量混じる)
 - 3 黒褐色土(炭化物僅かに含む)
 - 4 黒褐色粘質土(土器片含む)
 - 5 〃 (黄褐色土ブロック少量混じる)
 - 6 黒褐色粘質土
 - 7 黒色粘質土
 - 8 7層に似るが、より粘性高い
 - 9 7層に似るが、砂粒多く含む
 - 10 黒褐色粘質土(黄灰色細砂混じる)



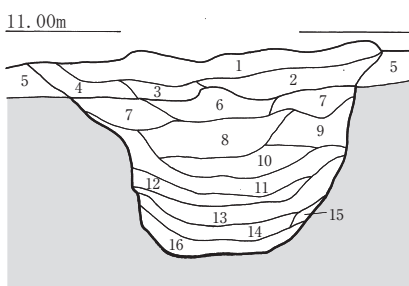
10.50m



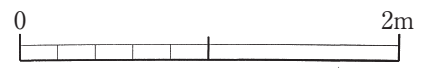
SE-3



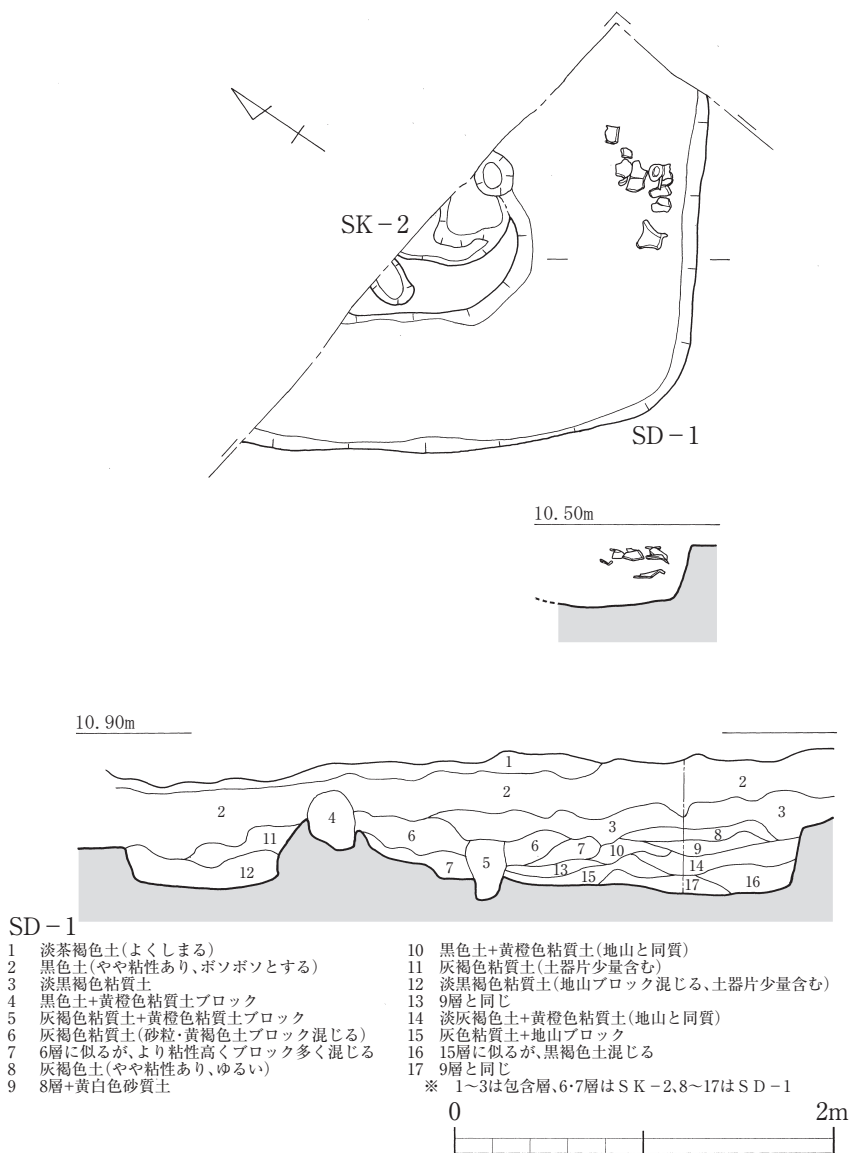
- SE-2
- 1 淡灰褐色土(やや粘性あり、砂粒を含みザラザラとする)
 - 2 黄橙色砂質土(灰褐色粘質土ブロック混じる)
 - 3 2層+黒色粘質土(粘性強い)
 - 4 淡黒褐色土(粘性強い)
 - 5 4層+黒色・黄橙色粘質土(粘性あるが、ゆるい)
 - 6 黄橙色粘質土+淡灰褐色粘質土ブロック(ゆるい)
 - 7 黒色粘質土(ゆるい、黄橙色粘質土ブロック混じる、木片多量に含む)



- SE-3
- 1 淡茶褐色土(しまりあり)
 - 2 黒褐色土(粒子細かく、ゆるい)
 - 3 2層+茶褐色土
 - 4 3層と似るが、ややしまりあり
 - 5 2層+茶褐色土・赤褐色土ブロック
 - 6 黒色粘質土(ゆるい、砂粒多く含む)
 - 7 6層+茶褐色土(地山と同質)
 - 8 6層に似るが、淡茶褐色土混じる
 - 9 黒色粘質土+赤褐色土ブロック
 - 10 8層+黄茶褐色土ブロック
 - 11 9層に似るが、茶褐色土(地山と同質)多く含む
 - 12 10層と同じ
 - 13 淡灰黒色粘質土(茶褐色粘質土ブロック混じる)
 - 14 11層+黄白色粘質土ブロック
 - 15 黒色粘質土+茶褐色土(地山と同質)
 - 16 15層に似るが、砂粒多く混じる



第5図 2A区SE-1~3実測図 (S=1/40)



第6図 2A区SK-2・SD-1実測図 (S=1/40)

SE-3 (第5図、図版3)

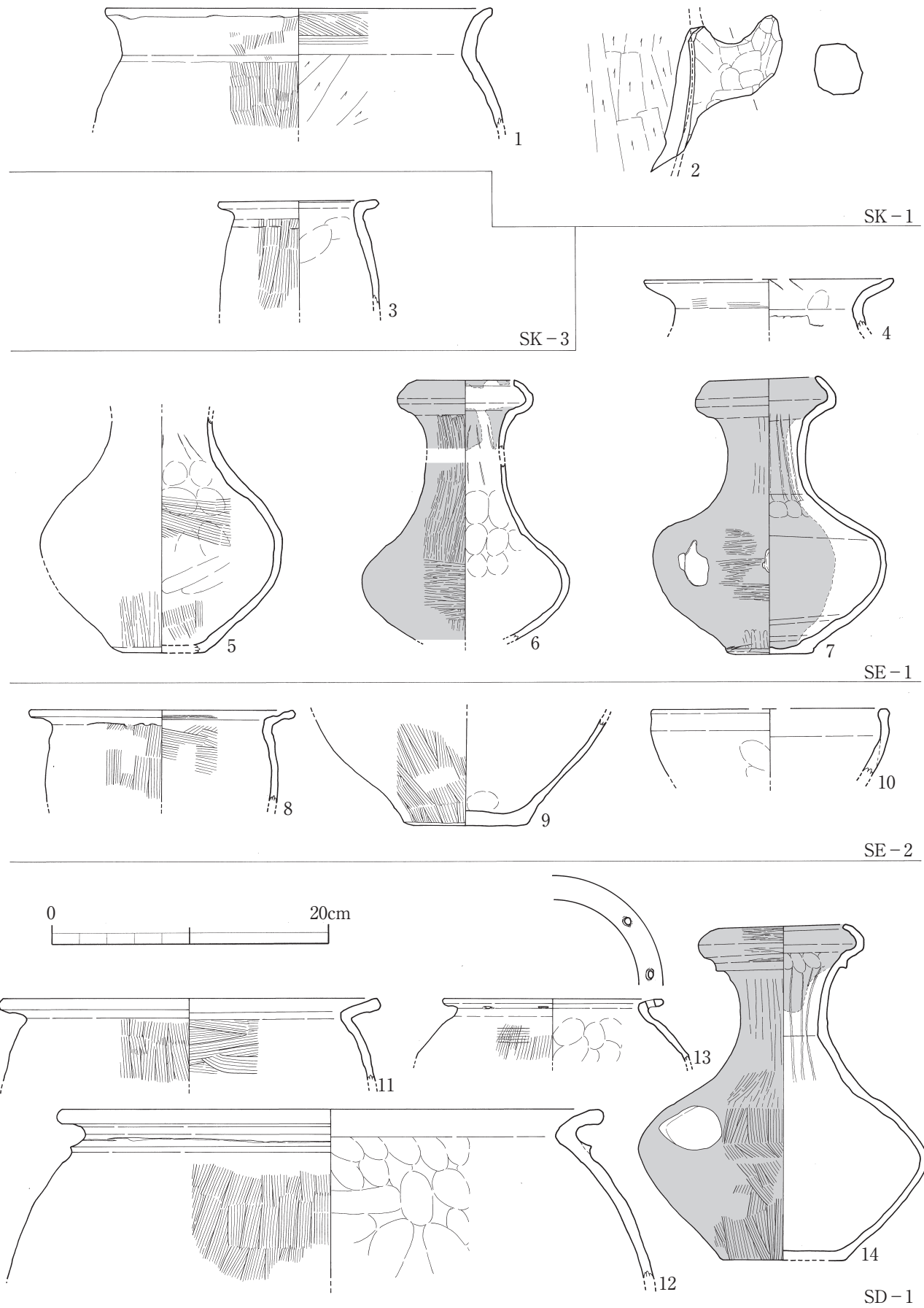
SE-3は、調査区南東壁に掛かるように検出した。現況上端1.10m×1.37mを測り、東西に長い楕円形を呈するものであろう。深さは78cmを測る。硬砂層までは掘り込まれてはいないが井戸と考えられ、雨水を利用していたものと推測される。

遺物の出土はない。

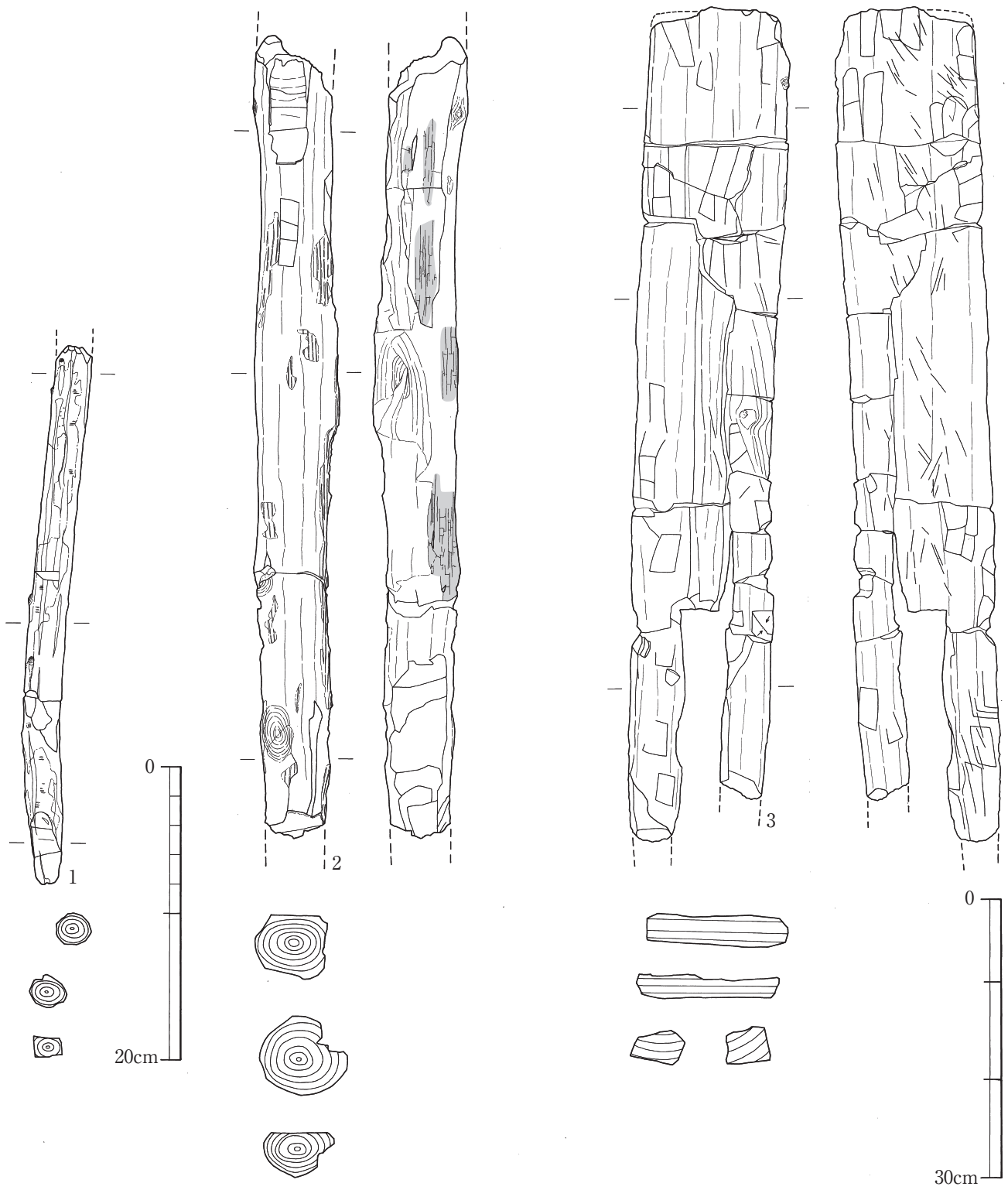
(3) 溝【SD】

SD-1 (第6図、図版3)

SD-1は調査区北部壁に掛かるように検出した。調査区壁面に掛かるためプランは不明だが、調査区内において屈曲しており、隅丸方形を呈するものと思われる。周溝状遺構の可能性もあろう。幅0.7m～1.0m、深さは30cm～33cmを測る。



第7图 2A区SK-1·3、SE-1·2、SD-1出土土器实测图 (S=1/4)



第8図 2A区SE-2出土木製品実測図 (1 : S=1/4、2・3 : S=1/6)



第9図 2A区SE-2出土編組品実測図 (S=1/1)

出土遺物

土器 (第7図、図版8)

弥生土器が4点出土している。11・12は甕である。双方ともに口縁端部は隅丸方形を呈する。11は直線的に口縁部が伸び、12はやや外反気味に口縁部をつまみ出しているが、頸部はくの字を呈する。12は頸部直下に1条の断面三角形突帯が貼り付けられている。13は無形壺である。口縁端部は丸味を帯び、2個1対の穿孔が1組残存している。頸部はくの字に屈曲している。14はほぼ完形に復元できる袋状口縁壺である。この壺はSE-1の下層出土の破片と接合している。口縁部は屈曲部分に緩い稜線をもち、口縁部直下には1条の断面三角形突帯が貼り付けられている。胴部の張りが強い。外面には全面に丹を塗り、内面は口縁部から頸部にかけて丹が流れおちている。また、外面には破裂痕がみられる。形態的特徴より、弥生時代中期後半～末の須玖Ⅱ式段階のものと考えられる。

第4章 大崎後原遺跡2B区の調査

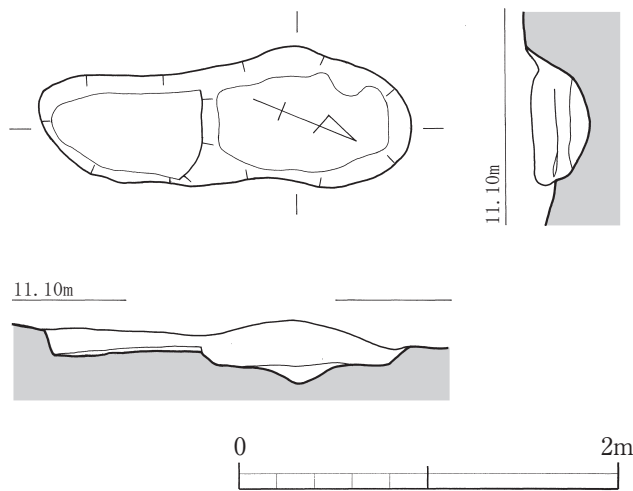
1 調査の概要

調査地は、2A区の南側にあたる。標高11.2m前後、遺構検出面で10.9m～11.0mを測り、緩やかに西に向けて傾斜する。

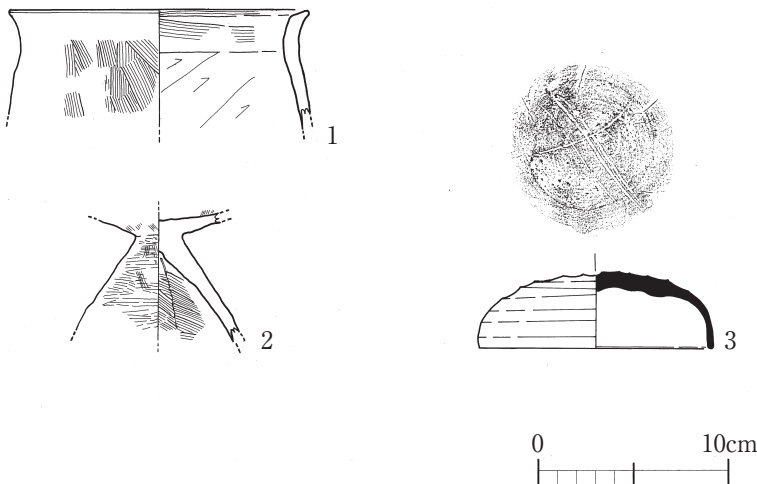
遺構検出面は2A区と同様の、淡茶褐色ローム層である。基本層序は造成土、黒褐色土、黒色シルトの包含層、その下で淡茶褐色ロームの地山面となる。さらに下は黄褐色土・淡黄白色の砂へと変わっていく。

検出した遺構は、土坑1基、溝1条である。

2 遺構と遺物



第10図 2B区SK-1実測図 (S=1/40)



第11図 2B区SD-1出土土器実測図 (S=1/4)

土師器2点と須恵器1点が出土している。1は土師器の甕である。口縁端部上面には端面が形成されている。頸部の屈曲は緩く、口縁部から胴部にかけて緩やかなカーブを描いている。2は土師器の器台である。受部下半から脚部にかけて残存する。内面脚部は、絞り痕の単位に合わせてハケメを施す方向にアクセントをつけている。3は須恵器の坏蓋である。外面に施されるヘラ削りは、連続して頂部まで調整を施している。外面にはヘラ記号が付されている。およそ7C初頭～前半に相当すると考えられる。

(1) 土坑【SK】

SK-1 (第10図、図版4)

SK-1は、調査区北部にて検出したSD-1を切る土坑である。1.9m×0.6mの南北に長い楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは、13cm～20cmを測る。

遺物の出土はない。

(2) 溝【SD】

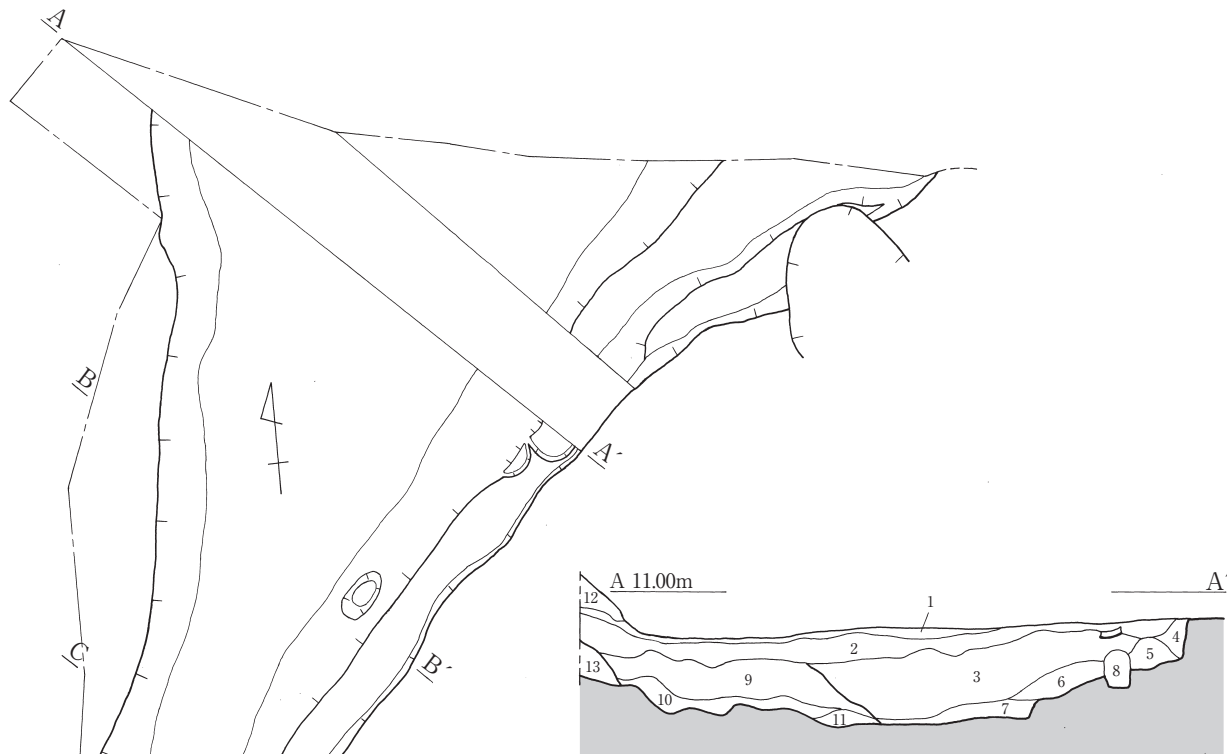
SD-1 (第12図、図版4)

SD-1は、調査区西壁沿いを南北に縦断する溝である。SK-1に切られる。検出長7.35m、深さは57cm～63cmを測る。幅は南側で1.05m、北側で4.05mと北に向けて広がる。土層観察によって掘り直されている様子が窺えた。本来は西寄りの溝であったものをやや東に振るように掘削し直したものである。

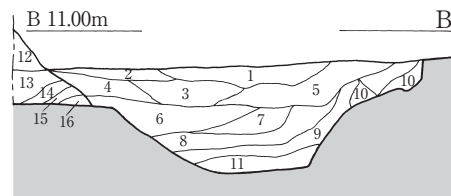
出土遺物

土器 (第11図、図版9)

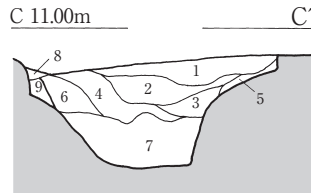
土師器2点と須恵器1点が出土している。1は土師器の甕である。口縁端部上面には端面が形成されている。頸部の屈曲は緩く、口縁部から胴部にかけて緩やかなカーブを描いている。2は土師器の器台である。受部下半から脚部にかけて残存する。内面脚部は、



- A - A'
- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 黄褐色土(整地層) | 8 黒褐色土(褐色土粒多く混じる) |
| 2 淡黒褐色土(粘性あり、ボソボソとする) | 9 灰褐色土(ゆるい、黄白色砂粒多量に混じる) |
| 3 黒褐色土(礫・砂粒中量混じる) | 10 黒褐色土(やや粘性あり、砂粒混じる) |
| 4 3層+黄褐色砂質土(地山と同質) | 11 9層に似るが、黄白色砂粒より多く混じる |
| 5 黒褐色土+黄白色砂質土 | 12 1層と同じ整地層(真砂土) |
| 6 3層と似るが、粘性高く砂粒多量に混じる | 13 黒褐色土(砂粒多く混じる) ※地形落ちの埋土 |
| 7 黒褐色土(粘性あるがゆるい) | |



- B - B'
- | | | |
|------------------------------|--------------------------------|------------------|
| 1 淡黒褐色土(礫・砂粒混じり、ザラザラとする) | 7 淡黒色土(砂粒僅かに混じる) | 13 黒褐色土 |
| 2 〃 (1層に似るが、砂粒少量混じる) | 8 黒褐色土(やや粘性あり、キメ細かい) | 14 黒褐色土(砂粒中量混じる) |
| 3 〃 (砂粒多量に混じる、土器片中量含む) | 9 黒褐色土(やや粘性あり、砂礫・褐色土ブロック少量混じる) | 15 黒褐色土+淡黄褐色土 |
| 4 〃 (灰褐色土少量混じる) | 10 8層+黄褐色土(よくしまる) | 16 淡黒褐色土+淡黄褐色土 |
| 5 〃 (1層に似るが、礫・砂粒少ない) | 11 9層+地山 | ※ 1~11はSD-1、 |
| 6 1層+黄褐色砂質土[地山](粘性強くザラザラとする) | 12 淡黒褐色土(包含層) | 13~16は地形落ちの埋土 |



- C - C'
- | |
|----------------------------|
| 1 淡黒褐色土(砂粒多く混じり、ザラザラとする) |
| 2 1層に似るが、淡茶褐色土混じる |
| 3 黒褐色土+茶褐色土(よくしまる) |
| 4 1層に似るが、砂粒・黄褐色土粘質土ブロック混じる |
| 5 黒褐色土+黄褐色砂質土[地山] |
| 6 2層と同じ |
| 7 黒褐色土(やや粘性あり) |
| 8 淡黒褐色土(包含層) |
| 9 黒褐色土(砂粒少量混じる) |
| ※ 1~7はSD-1、9は地形落ちの埋土 |

第12図 2B区SD-1実測図 (S=1/40)

第5章 大崎後原遺跡2C区の調査

1 調査の概要

調査地は、2A区の東にあたる。標高11.2m前後、遺構検出面で10.4m～10.5mを測る。

遺構検出面は2A区・2B区と同様で、淡茶褐色ローム層である。基本層序は造成土、黒褐色土、黒色シルトの包含層、その下で淡茶褐色ロームの地山面となる。さらに下は黄褐色土・淡黄白色の砂へと変わっていく。

検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝1条、ピット多数である。

2 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡【SB】

SB-1 (第13図、図版5・6)

SB-1は、調査区南部で検出した2間×2間の総柱建物である。検出した柱穴は7基で、芯心間の距離は北辺で3.2m、東辺で3.05mである。主軸はN-18°-Sである。柱掘方は隅丸方形から円形で、径59cm～79cm、深さは30cm～61cmを測る。柱痕は、P-4で確認され、柱抜き取り痕はP-1・5・6・7で確認できる。

遺物は各柱穴より出土しているが、いずれも小片のため図化するに至らなかった。

(2) 土坑【SK】

SK-1 (第14図、図版6)

SK-1は、調査区北西壁際にて検出した、SD-1を切る土坑である。1.28m×0.96mの不整形円形を呈し、検出面から底面までの深さは20cm程度である。底面は平坦である。

遺物は白磁碗・小坏の破片の出土があったが、いずれも小片のため図化するに至らなかった。近世期の所産であろう。

SK-2 (第14図、図版6)

SK-2は、調査区南部にて検出された土坑である。SB-1のP-2・5に切られる。径1.2m程の楕円形を呈するものである。検出面から底面までの深さは最大で22cmを測る。

遺物の出土はない。

(3) 井戸【SE】

SE-1 (第15図、図版6)

SE-1は、調査区南壁に掛かるように検出された。ピットに切られるため詳細は不明であるが、径1.2m程の円形を呈すものと思われる。埋土は、2・3層は人為的な埋土である。検出面から底面までの深さは約1mと浅く、また包水層である硬砂層までは達していないため、雨水などの溜り水を利用する井戸と考えられよう。

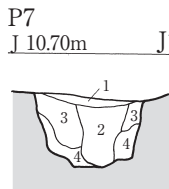
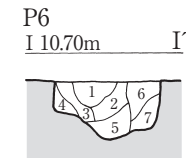
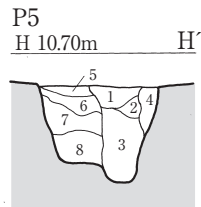
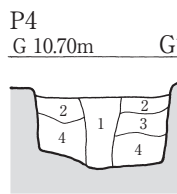
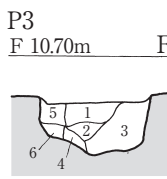
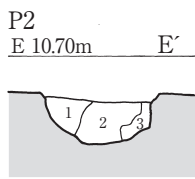
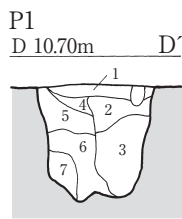
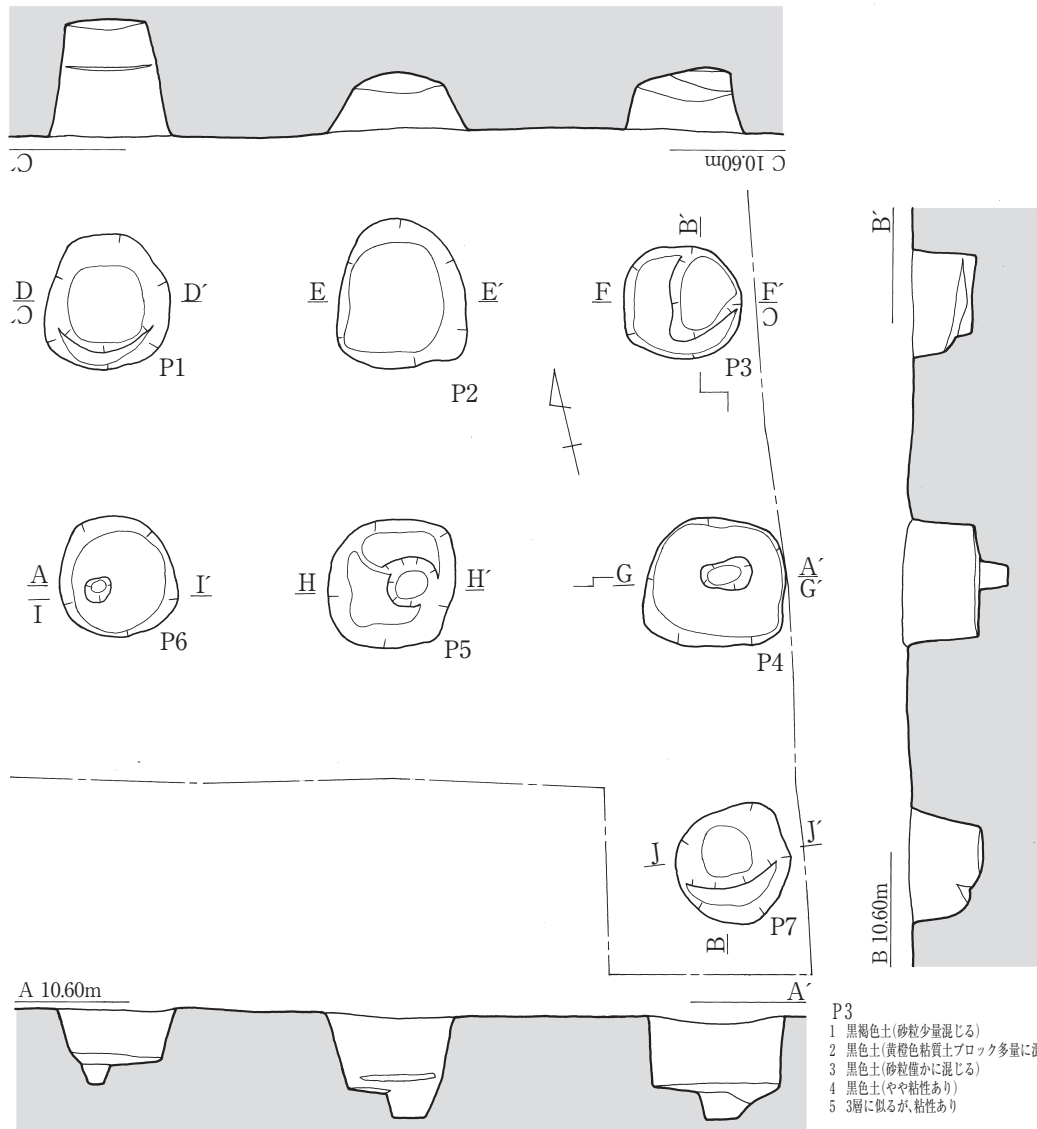
遺物の出土はあったが、小片のため図化するに至らなかった。また、小片のため器種等は不明である。

(4) 溝【SD】

SD-1 (第16図、図版7)

SD-1は、調査区を東壁から西壁にかけて屈曲しながら横断するように検出した溝である。現状で全長9.6mを測る。

遺構は、調査区北東コーナーから南西方向に約4.6m伸びたところで北西方向に屈曲する。屈曲した後、北西方向に約5.0m伸び調査区西壁に至る。幅は西端で2.1m、東端で1.5m、屈曲部



SB-1

- P1**
1 淡黒褐色土(黄褐色土粒混じる)
2 黒褐色土(褐色土ブロック・黄茶褐色土粒混じる)
3 黒褐色土(黄橙色粘質土[地山]ブロック混じる)
4 黒色土+黄白色粘質土
5 1層に似るが、灰黄褐色土ブロック混じる
6 黒色土(黄茶褐色土ブロック混じる)
7 黒色土+地山ブロック

- P2**
1 黒色土(茶褐色土粒混じる)
2 淡黒色土(黒色・黄褐色土ブロック混じる)
3 茶褐色土(黄橙色粘質土[地山]ブロック混じる)
4 黒色粘質土+地山ブロック

P3

- 1 黒褐色土(砂粒少量混じる)
2 黒色土(黄橙色粘質土ブロック多量に混じる)
3 黒色土(砂粒僅かに混じる)
4 黒色土(やや粘性あり)
5 3層に似るが、粘性あり

P4

- 1 灰黄褐色土(黄褐色土ブロック少量、灰色土ブロック多量に混じる)
2 黒褐色土(灰色土ブロック少量混じる)
3 黒褐色土(黄褐色土ブロック多量に混じる)
4 黒色土(黄褐色土ブロック少量混じる)

P5

- 1 暗褐色土(ゆるい、黄褐色土粒少量混じる)
2 黒褐色土(黄褐色土ブロック少量混じる)
3 黒色土(ややしまりあり、黄褐色土粒少量混じる)
4 黒色土(黄褐色土粒混じる)
5 黄褐色土(黒褐色土粒多量に混じる)
6 褐灰色土(黄褐色土粒多量に混じる)
7 暗褐色土(黄褐色土・褐色土粒混じる)
8 黄褐色土(褐色土粒混じる)

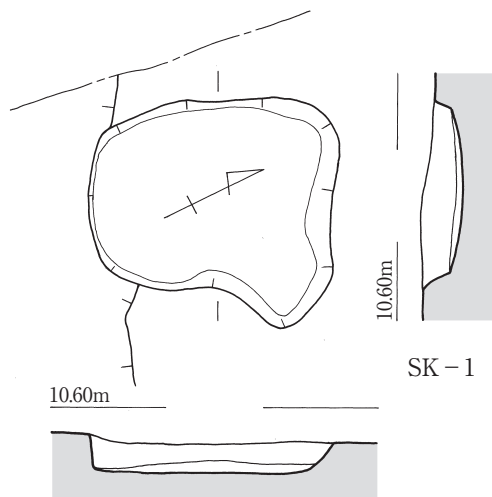
P6

- 1 黒褐色土(砂粒わずかに混じる)
2 1層+黄褐色粘質土[地山]ブロック
3 1層に似るが、灰黄褐色土混じる
4 2層と同じ
5 茶褐色土ブロック+地山
6 黒色土(粘性あり、黄褐色土粒混じる)
7 5層と同じ

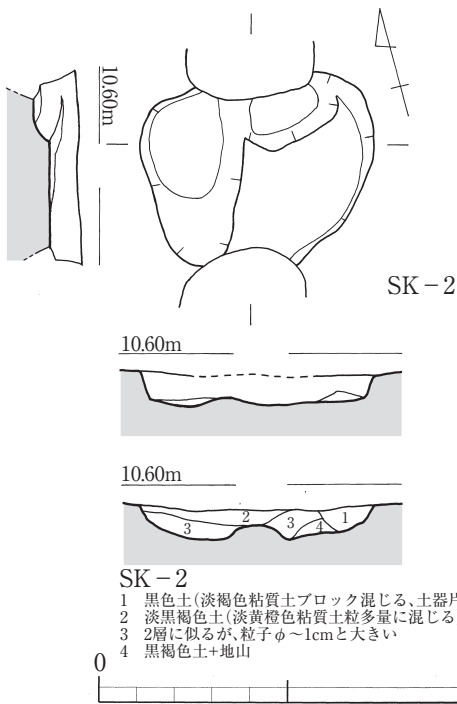
P7

- 1 淡黒褐色土(地山ブロック僅かに混じる)
2 淡黒色土(黒色・黄褐色土ブロック混じる)
3 淡黒褐色土(地山ブロック大量に混じる)
4 1層+茶褐色粘質土

第13図 2C区SB-1実測図 (S=1/40)



SK-1



SK-2

SK-2

- 1 黒色土(淡褐色粘質土ブロック混じる、土器片含む)
- 2 淡黒褐色土(淡黄橙色粘質土粒多量に混じる)
- 3 2層に似るが、粒子φ~1cmと大きい
- 4 黒褐色土+地山

第14図 2C区SK-1・2実測図(S=1/40)

出土遺物

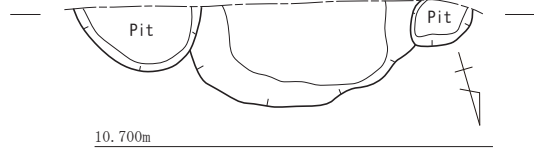
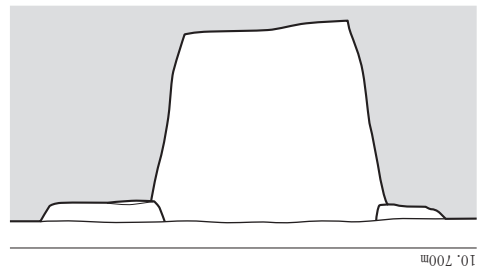
土器(第17~22図、図版9~11)

上層(第17・18図、図版9)

遺構検出面直上より出土したものは、第17図と第18図である。

第17図1~9は、土師器の甕である。口縁端部は、上方に拡張する跳ね上げ口縁のもの(1・2・4)、隅丸方形のもの(3・7・9)、丸くおさめるもの(8)の3種類がみられる。頸部は、全くの字を呈するが、4・7は屈曲が緩い。底部は口径の小さな平底を呈する。器壁は薄く、5・6・9の外面ではタタキ調整が施される。1・2の内面ではヘラ削りが施されるものの、総じて内外面ともにハケメ調整を主体的に施している。5は、底部付近において焼成後に内側からあけたと想定される穿孔が1箇所みられる。

第18図1・2は頸部と胴部の境に明瞭な稜線をもつ広口壺である。1は口縁部をやや上方につまむ。2は口縁端部内面において、本来貼り付けていた粘土紐が剥離した痕跡がみられる。第18



SE01

- 1 黒色土(φ10cm以下の黄白色砂質土ブロックを少量含む)
- 2 黄褐色弱粘質土(φ10cm以下の褐色弱粘質土を多量に含む)
- 3 黄褐色弱粘質土(φ5cm以下の黒色土を多量に含む)
- Pit 褐色土
- ※2・3は人為的に埋められたものと思われる

第15図 2C区SE-1実測図(S=1/40)

では2.1mを測る。検出面から底面までの深さは56cm~80cm、断面形状はU字型に近い逆台形を呈している。埋土は基本的にはレンズ状堆積で、人為的埋め戻しは見られない。

遺物は、上層~下層に至るまで大量に出土しており、遺構検出面直上において散見されたまとまりと、遺構の中・下層よりまとまって出土したものと区分できる。遺物の出土は、特に屈曲部より西側の北壁沿いに集中している。器種は、甕・壺・蓋・高杯・器台・鉢・手捏ね土器・支脚とバリエーションに富む。埋土の堆積に合わせるように南に向けて傾斜して検出されたことから、北側から投棄されたものと考えられる。

図3～5は高杯である。3は脚部から裾部に向かって緩やかに広がる。4・5は短い柱状部に低くて大きく開く裾部を呈し、特に4は脚部上半が中実である。杯部は5のみ残存しており、杯部が途中で屈曲し上方へと伸びる。裾部の穿孔は、4で2個、5で3個みられる。第18図6・7は器台である。双方ともに皿状受部に直線的に広がる脚部をもつ。7は受部がやや浅く、6は脚部に3個の穿孔がみられる。第18図8は鉢である。底部には焼成前にあけたとみられる穿孔がある。第18図9・10は坏である。10は外面にヘラ記号とみられる線が刻まれている。第18図11は内外面ともにヘラ削りを施した細長い筒状を呈しており、製塩土器と想定される。第18図12は支脚である。被熱のためか、非常にもろい。

上記より、上層より出土した土器は、第18図9・10など一部において古墳時代後期の様相を呈するものがみられるものの、総じて古墳時代初頭～前期を中心とした一群と考えられる。

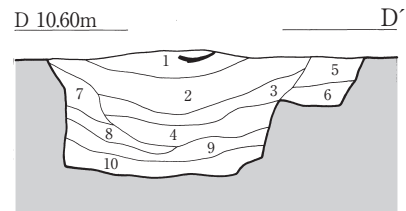
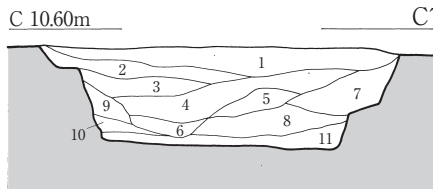
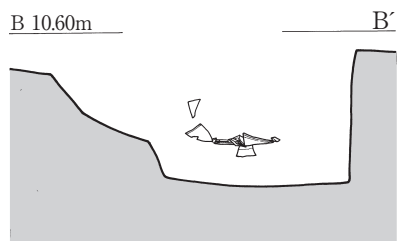
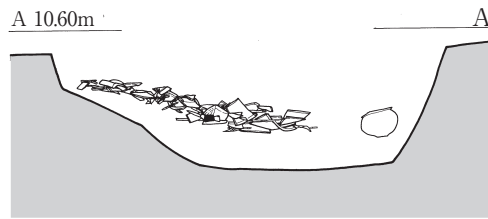
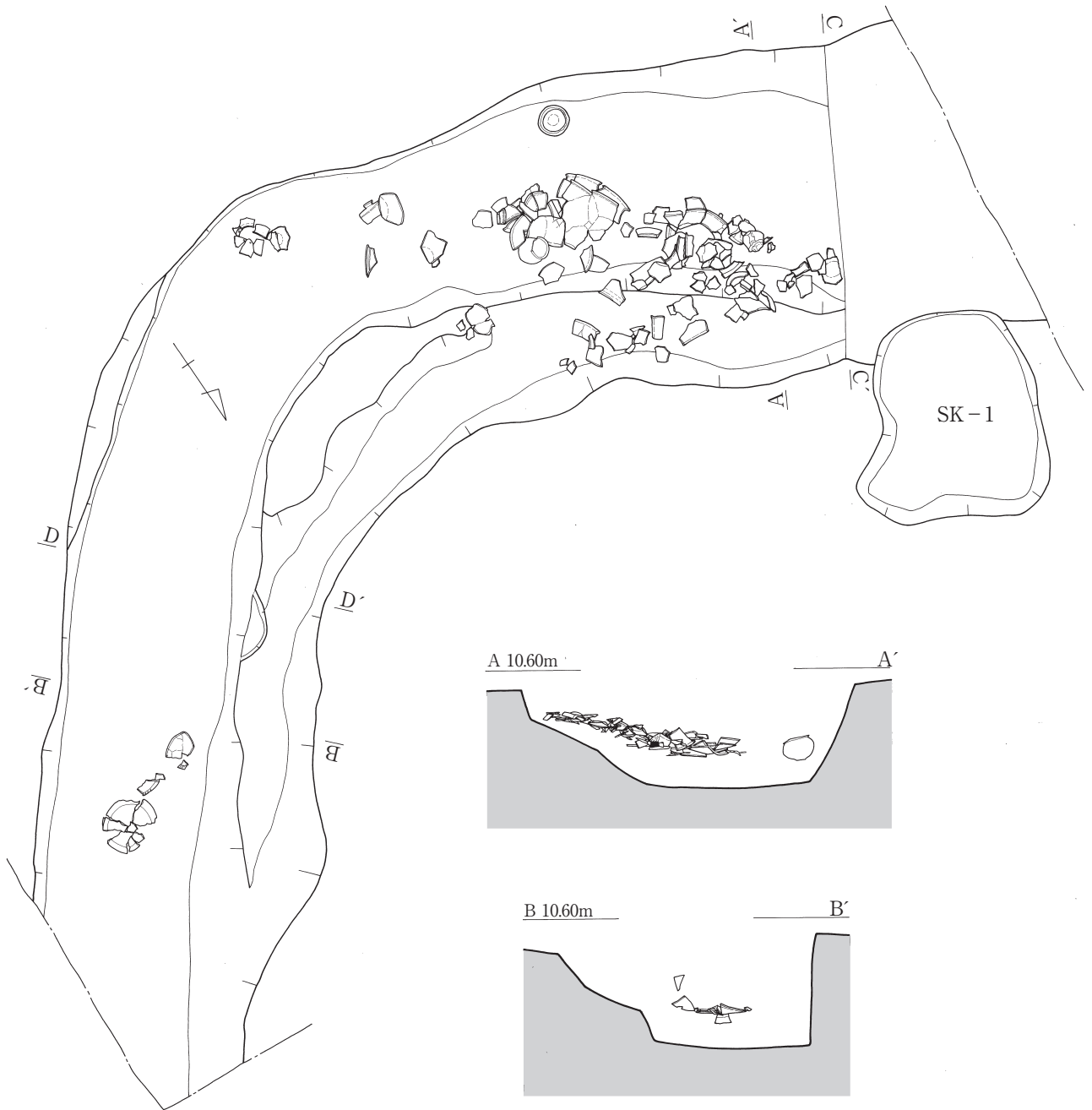
中・下層（第19～22図、図版10・11）

遺構の中・下層よりまとめて出土したものは、第19～22図である。

第19図1～8、第20図1～6は甕である。第19図1は、口縁部が水平方向に伸び、口縁端部が下方に肥厚する逆L字状を呈する甕である。第19図2～8、第20図1～3は、稜線の緩いくの字甕である。口縁端部は、丸みを呈するもの（第19図6～8）、肥厚するもの（第19図2・3、第20図3）、隅丸方形を呈するもの（第19図4・5、第20図1・2）の3種類がみられる。このうち、第19図3では、口縁部内面に刻目がみられる。同様の刻目を口縁部内面に施した甕は、大崎中ノ前遺跡2の住居より出土している（市報告123集）。第19図3と刻目の形状は異なり直線的な刻目を口縁部内面に施した甕は、大崎中ノ前遺跡1・2の住居や溝から出土した日常的な甕（市報告116集・123集）だけでなく、干潟遺跡5でみられるように甕棺においても施されている（市報告116集）。こうしたタイプの刻目を施す甕は、当該期に相当する小郡市域の各遺跡において数点の出土を確認することができる。また、第19図5では、胴部に方形突帯が1条施されている。第19図6では、口縁部内面に刻目か穿孔を意識したと考えられる窪みが1箇所みられる。第19図7では、頸部に穿孔が1個残存しているが、本来は対角線上にもう1箇所穿孔があげられていたと想定される。第20図4は内外面全面に丹が塗られた精製土器である。口縁端部は内側に短く突出し外側へやや長く伸びる鋤先口縁を呈し、口縁部直下の外面にはM字突帯がみられる。口縁部内面では、直線の暗文が施されている。第20図5・6は平底の底部である。5は、底部内面に放射状の工具痕がみられる。

第21図1～10は壺である。1は広口壺である。口縁部は内側に短く突出し、外側へやや長く伸びる鋤先口縁である。頸部と胴部の境の稜は明瞭であり、外側に断面三角形突帯を1条施している。2・3は瓢形土器であり、外面は全面に丹が塗られている。双方ともに頸部と胴部の境に断面三角形突帯を1条施すものの、胴部に施している突帯に差異がみられる。2は上側に方形突帯1条、下側にM字突帯1条を施すが、3は断面三角形突帯1条を施す。4は広口壺か袋状口縁壺の胴部である。また、5・6は細別器種が不明なもの壺の底部であり、総じて平底を呈する。7～9は無頸壺である。くの字口縁に球形状の胴部を呈し、底部は胴部との境において凸レンズ状を呈する7・9と、凹レンズ状を呈する8がみられるものの、総じて平底である。口縁部には穿孔があげられており、7は1個、8は2個1対が対角線上に2組、9は2個1対が1組みられる。7・9は残存部分が限られているものの、8同様に本来は対角線上に同様な穿孔があげられていたと想定される。8・9では丹が外面全面に塗られており、内面の口縁部から胴部にかけては丹が垂れた様子が看取される。9は底部中央において焼成後に外側から内側に向けてあけたと想定される穿孔が1箇所みられる。10は台付壺とみられる。口頸部に方形突帯を1条施し、口縁部内面から外面において丹が塗られている。

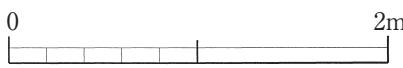
第21図11・12は低平で厚味の一様な蓋であり、双方とも外面全面に丹が塗られている。双方ともに2個1対の穿孔があげられているが、本来は対角線上に同様の2個1対の穿孔があげられていたと



SD-1

C-C'

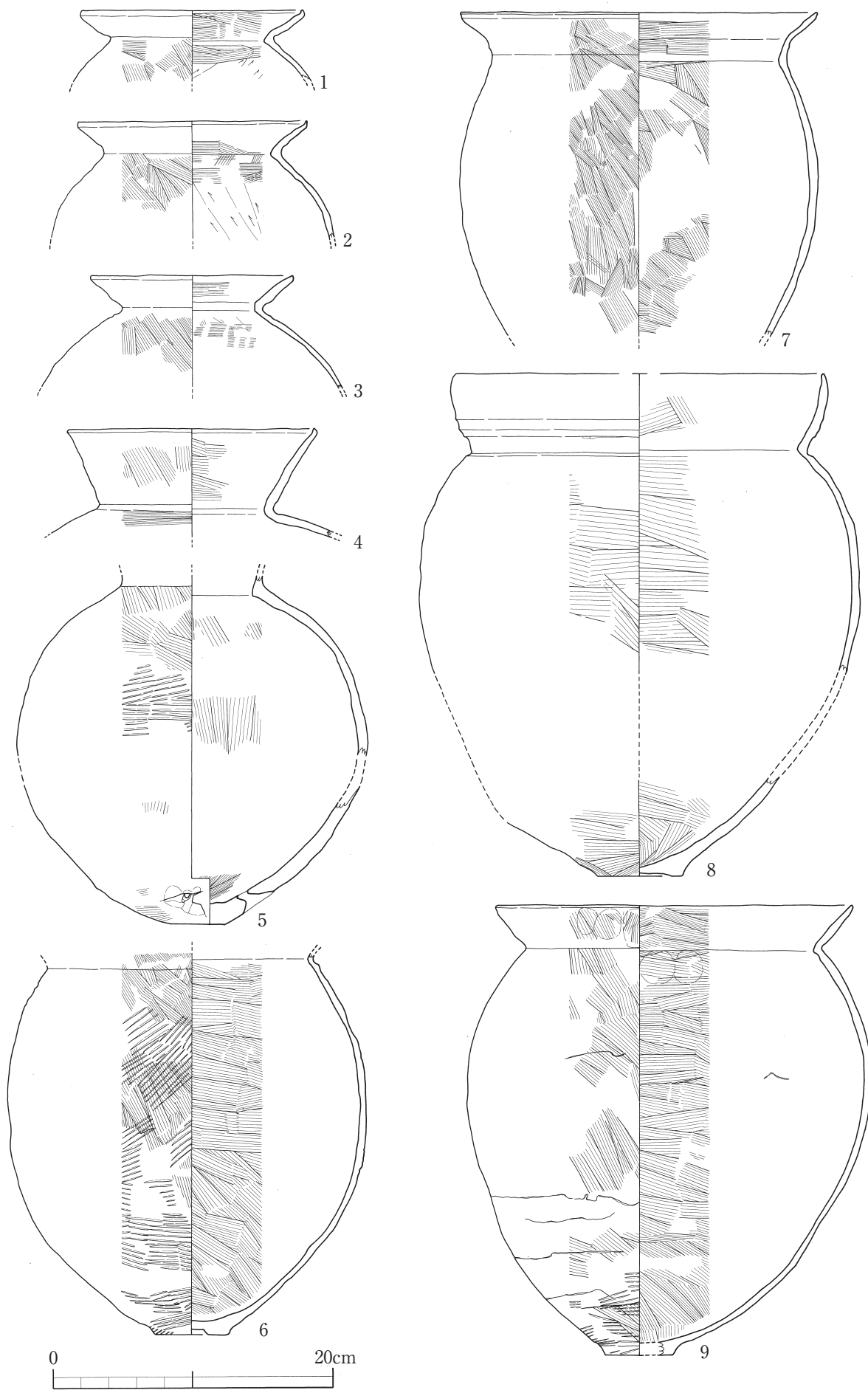
- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土(ややしまりあり、土器片多量に含む)※包含層 | 6 褐色土(黄褐色・灰色土少量混じる) |
| 2 黒褐色土(黄褐色土粒僅かに混じる) | 7 黒色土(黄褐色土少量混じる、土器片多量に含む) |
| 3 褐色土(黄褐色土ブロック混じる) | 8 黒褐色土(明黄褐色土多量に混じる) |
| 4 褐色土(黄褐色・灰色土粒少量混じる) | 9 褐色粘質土(黄褐色土粒少量混じる) |
| 5 黒褐色土(黄褐色・灰色土少量混じる) | 10 褐灰色粘質土(ゆるい、黄褐色土ブロック多量に混じる) |
| | 11 黄褐色粘質土(粘性あり、灰白色シルト[地山]多量に混じる) |



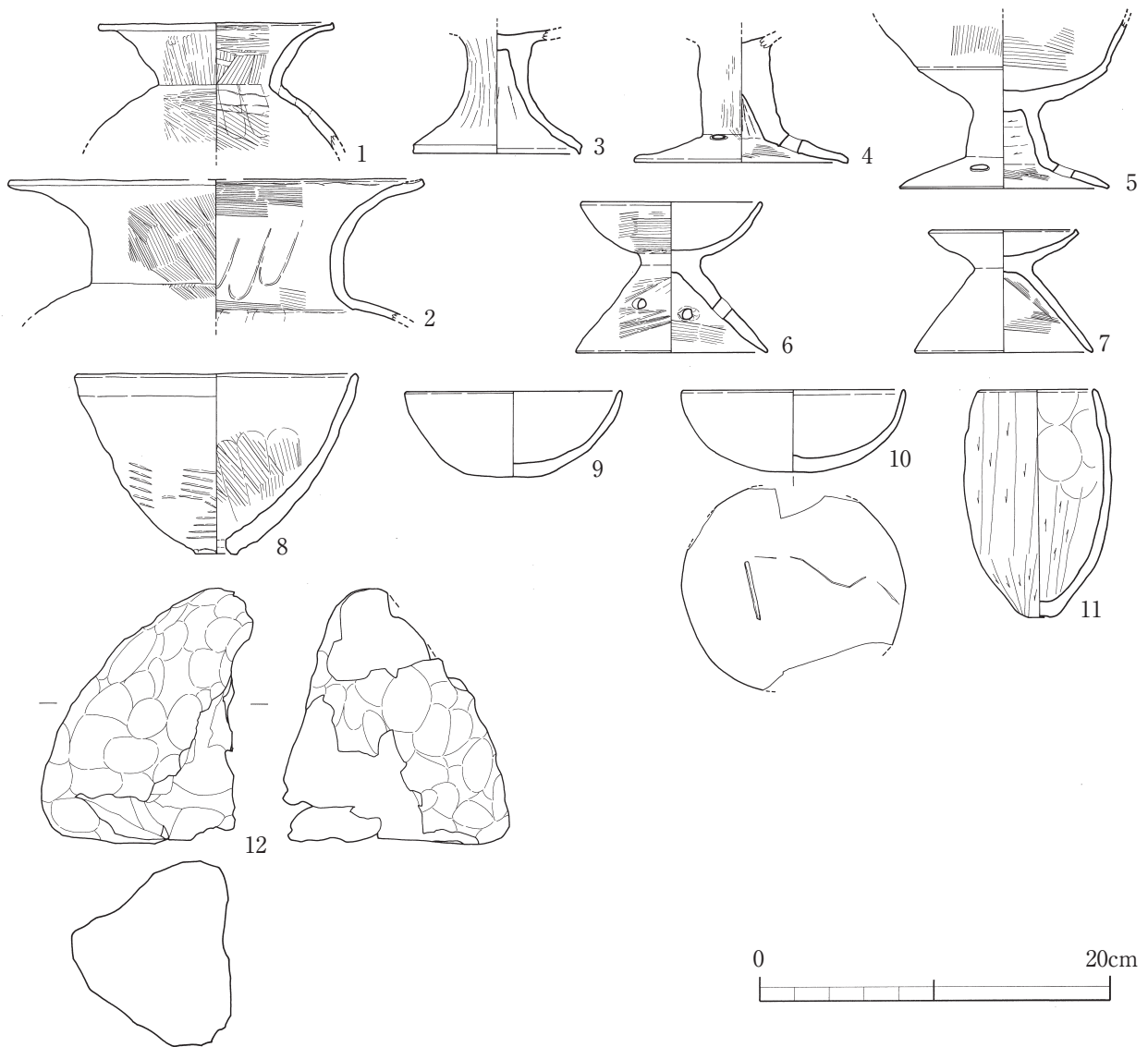
D-D'

- | |
|---------------------------------|
| 1 黒褐色土(ややしまりあり、土器片多量に含む)※包含層 |
| 2 淡黒褐色土(黄褐色粘質土ブロック僅かに混じる) |
| 3 2層に似るが、ブロック多量に混じる(80%) |
| 4 黒色粘質土(灰白色粘質土粒混じる、土器片含む) |
| 5 黒色土(橙色土粒僅かに混じる) |
| 6 5層+淡黄褐色粘質土(地山と同質) |
| 7 6層と同じ |
| 8 黒色粘質土(ゆるい、橙色土ブロック混じる、土器片少量含む) |
| 9 黒色粘質土(ゆるい) |
| 10 黄灰白色シルト+灰褐色粘質土(粘性強い、土器片含む) |

第16図 2C区SD-1実測図 (S=1/40)



第17图 2C区SD-1上層出土土器実測图① (S=1/4)



第18図 2C区SD-1上層出土土器実測図② (S=1/4)

想定される。出土状況より、11は第21図8の無頸壺とセットで使用されていたと想定される。

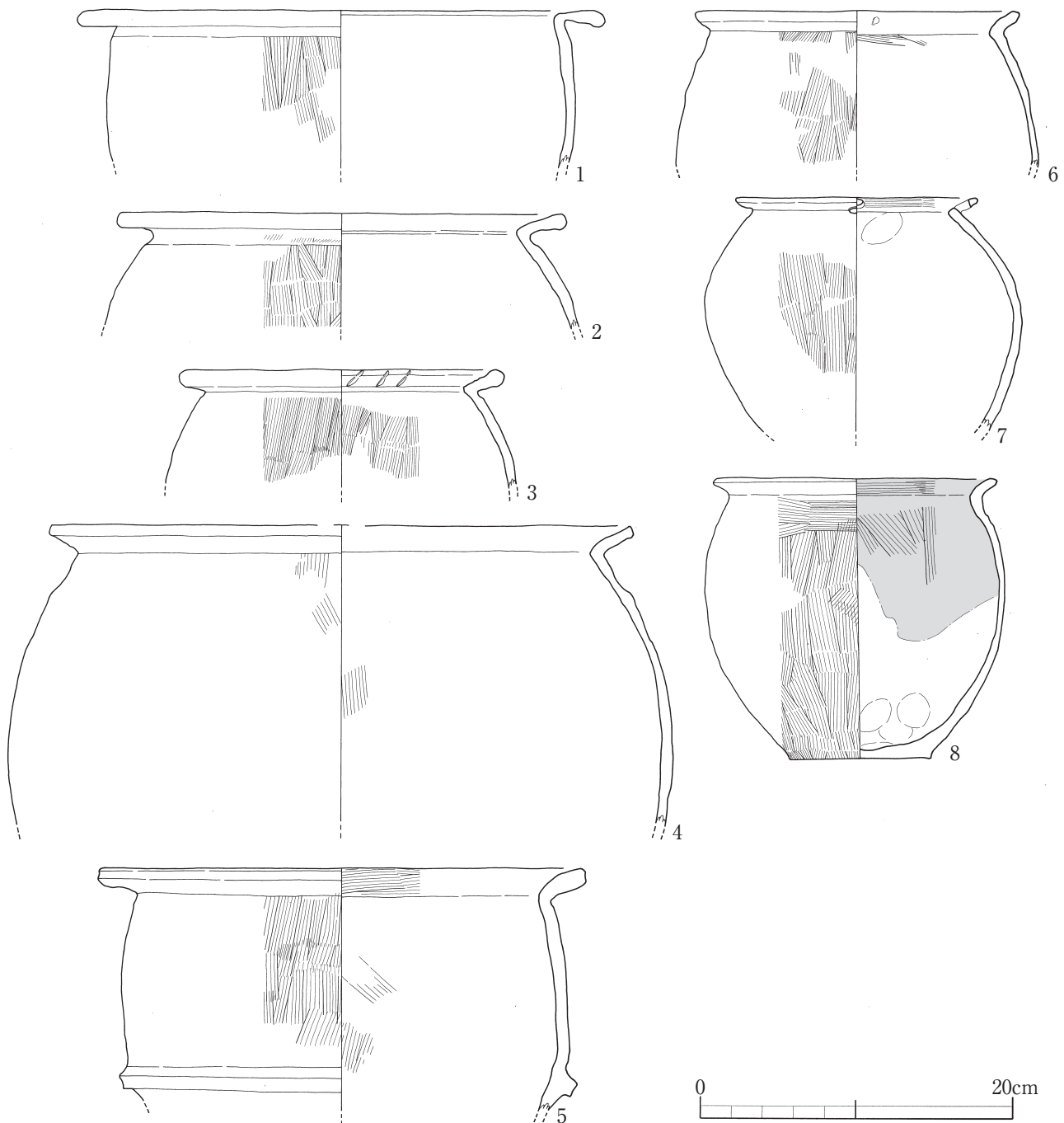
第22図1～4は高杯である。1～3の口縁部は内側に短く突出し外側に長く伸びる鋤先口縁であるのに対し、4の口縁部は外側にやや長く伸びるのみの鋤先口縁であることから、1～3より新相と考えられる。また、2・3は杯部内面において多角形にヘラミガキを施している。1～3は外面全面と内面杯部に丹が塗られている。特に、2・3は口縁部内面に暗文が施されており、2は直線、3は格子文風であり、どちらも無作為に引いた斜線である。

第22図5～7は鉢である。口縁部は、5が素口縁に断面三角形突帯を内側に向けて貼り付けたもの、6が素口縁、7がくの字口縁と多様である。しかし、総じて胴部は半球形の丸みをもち、底部は平底である。

第22図8・9は手捏ね土器である。

第22図10～12は器壁の厚い支脚である。10・11は中空であり、10は筒状を、11は脚裾がやや広がる筒状を呈する。12は裾部の破片であるため上部構造は不明であるが、形態的特徴より、裾部が最も広がり中空が途中でなくなる三角錐型の支脚と想定される。

上記より、中・下層より出土した土器は、第22図8～12など一部において古墳時代初頭～前期

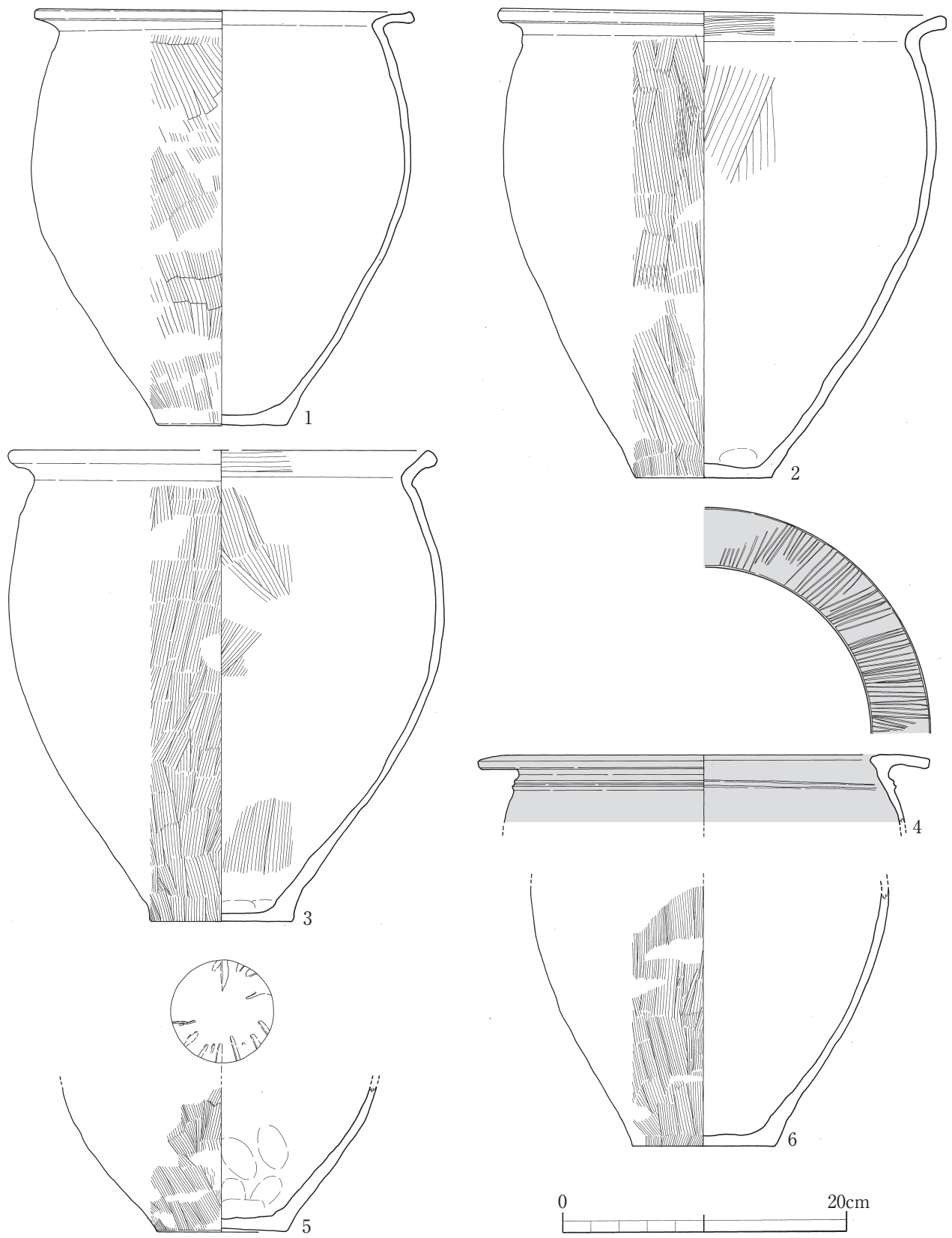


第19図 2C区SD-1中・下層出土土器実測図① (S=1/4)

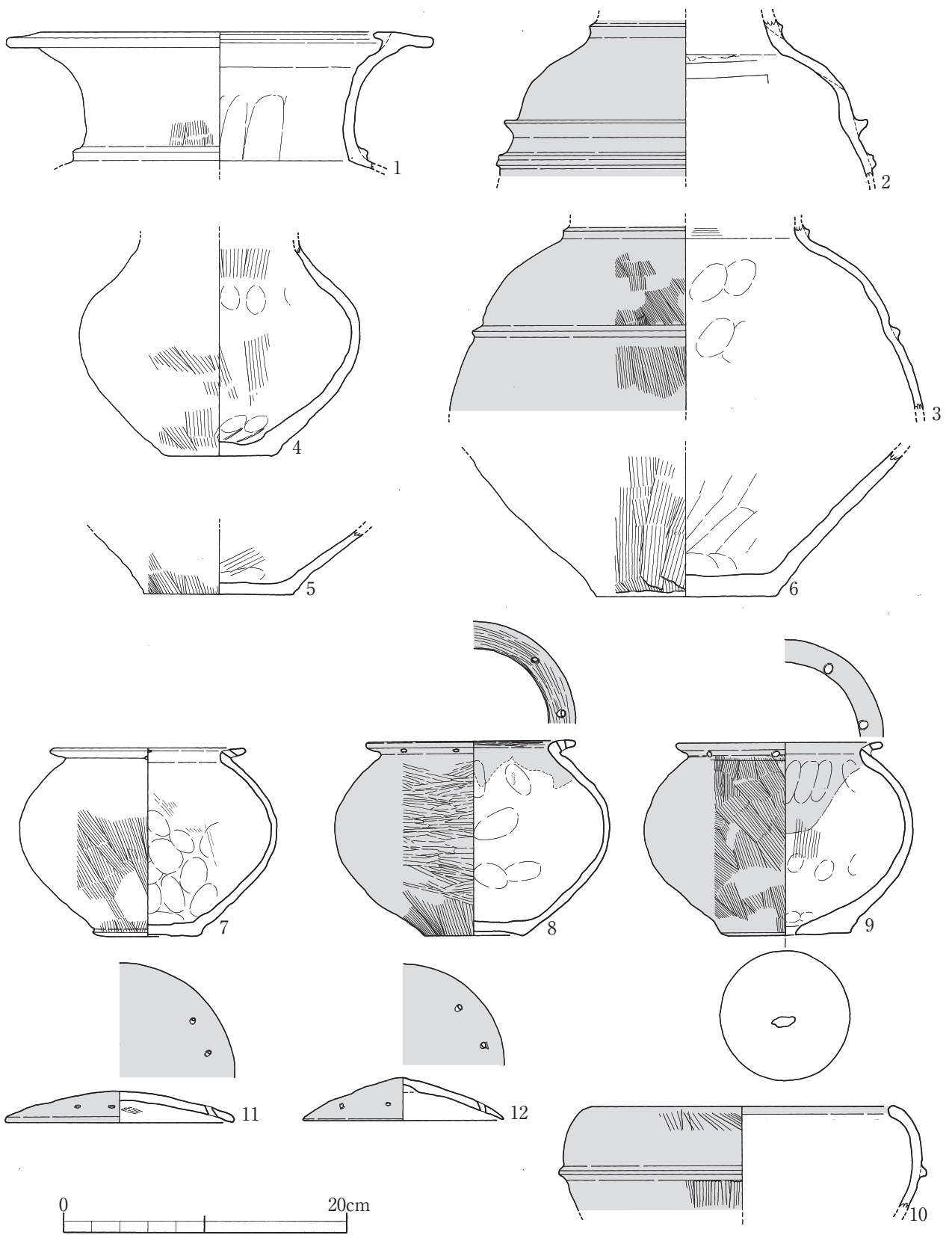
の様相を呈するものがみられるものの、総じて弥生時代中期後半～末（須玖Ⅱ式段階）を中心とした一群と考えられる。

石器（第23図、図版11）

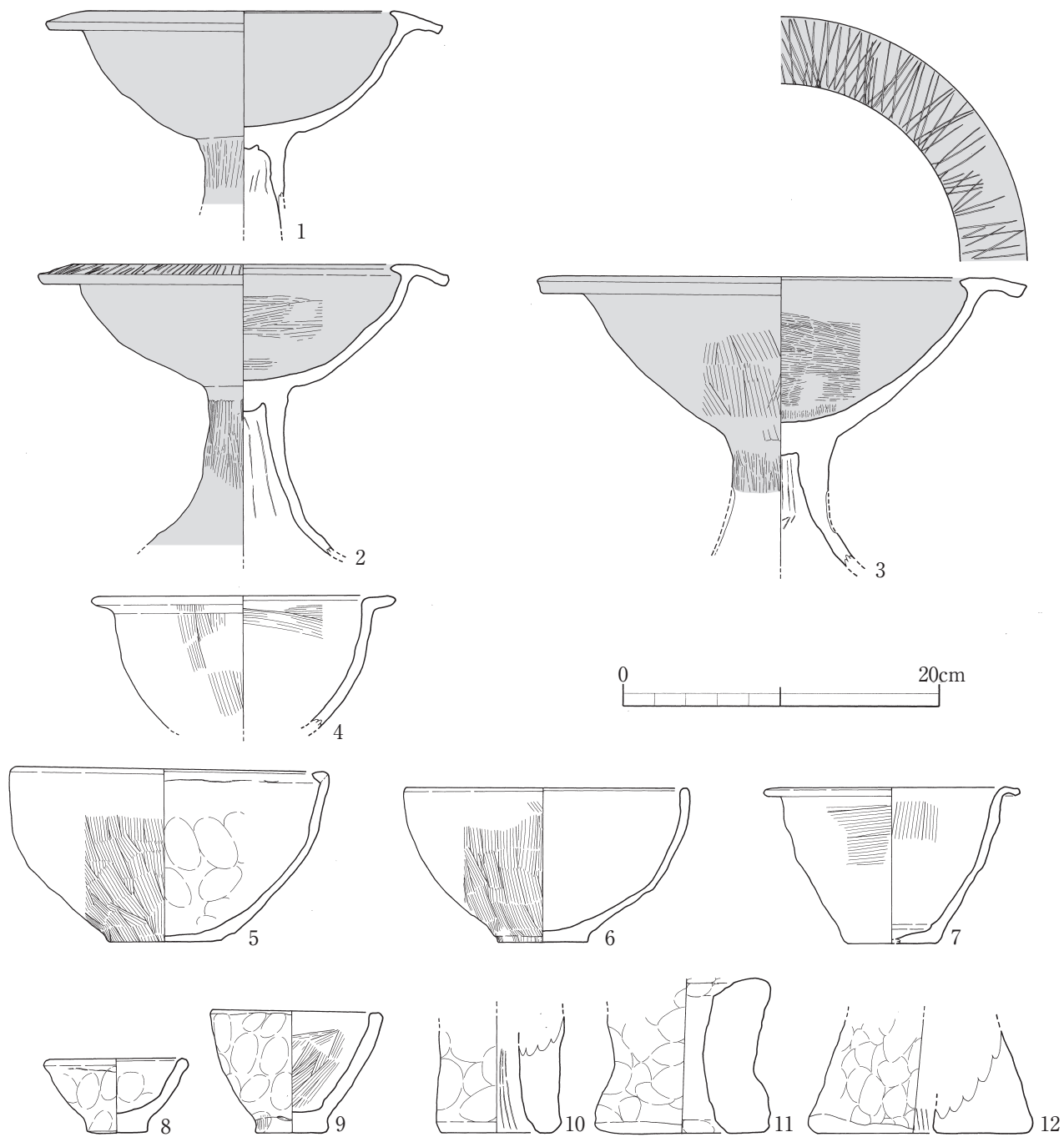
1は粘板岩製石庖丁である。約1/3を欠損しており、現状で長さ7.9 cm、幅3.9 cm、厚さ0.65 cmを測る。穿孔は2箇所認められ、うち残存状況の良い1つは孔径9mmを測る。2は粘板岩製砥石である。先端部分が両側とも欠損しているが、長さ13.5 cm、幅6.8 cm、厚さ4.8 cmを測り、上面・下面・側面の4面を砥石として利用している。3は頁岩製砥石である。一部側面の角が欠損しているが、長さ13.2 cm、幅11.1 cm、厚さ6.1 cmを測り、本来は三角錐状を呈していたと考えられる。上面・側面の2面を砥石として利用している。



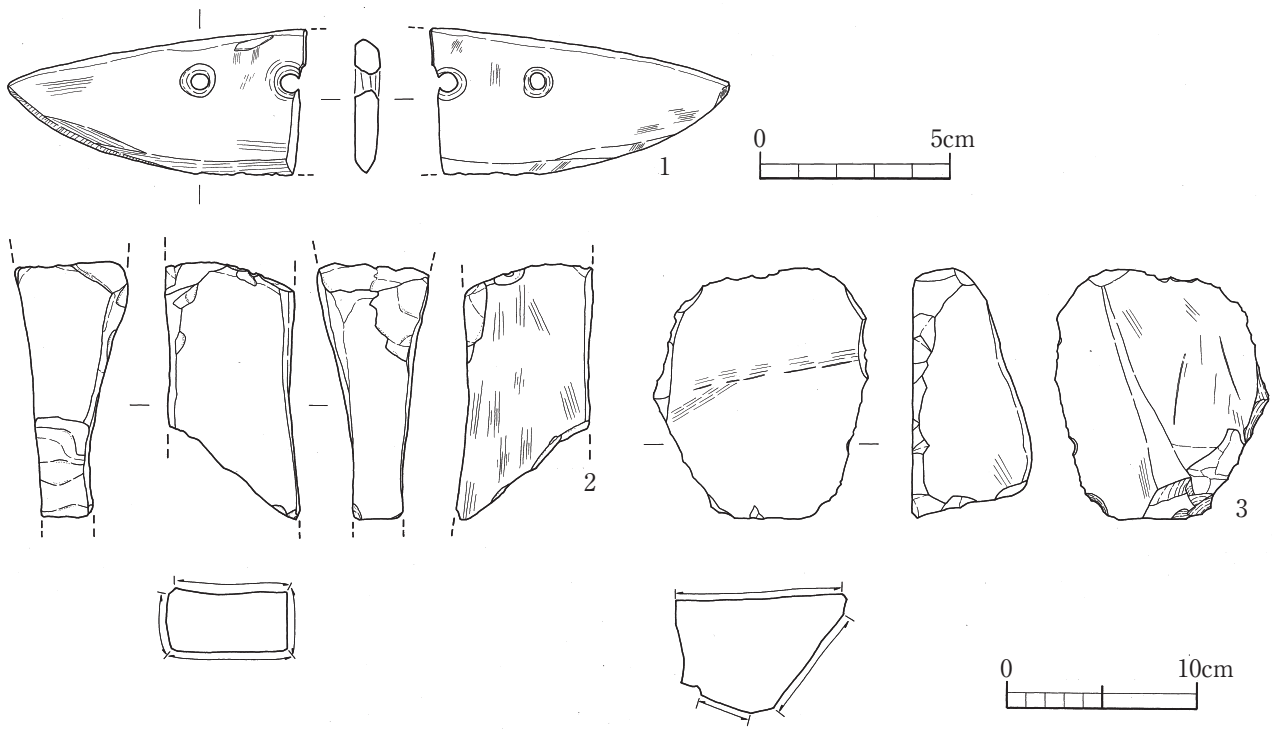
第 20 图 2 C 区 SD-1 中·下層出土土器实测图② (S=1/4)



第 21 图 2 C 区 SD-1 中·下層出土土器实测图③ (S=1/4)



第22图 2C区SD-1中·下層出土土器実測図④ (S=1/4)



第 23 图 2C区SD-1出土石器实测图 (1 : S=1/2、 2·3 : S=1/4)

第6章 まとめ

1 各遺構の時期と大崎後原遺跡の広がりについて

2次にわたる大崎後原遺跡の調査では、弥生時代中期及び古墳時代を中心とした遺構が確認されている。調査区が矮小であり遺構密度も低いことから詳細は不明であるが、現在時期が確定できる弥生時代中期の遺構を基に、大崎後原遺跡の広がりについてまとめたい。

これまでの調査において、弥生時代中期に相当する遺構は、以下のとおりである。

1次調査・・・D-1 2次調査・・・2A区SE-1・SD-1、2C区SD-1

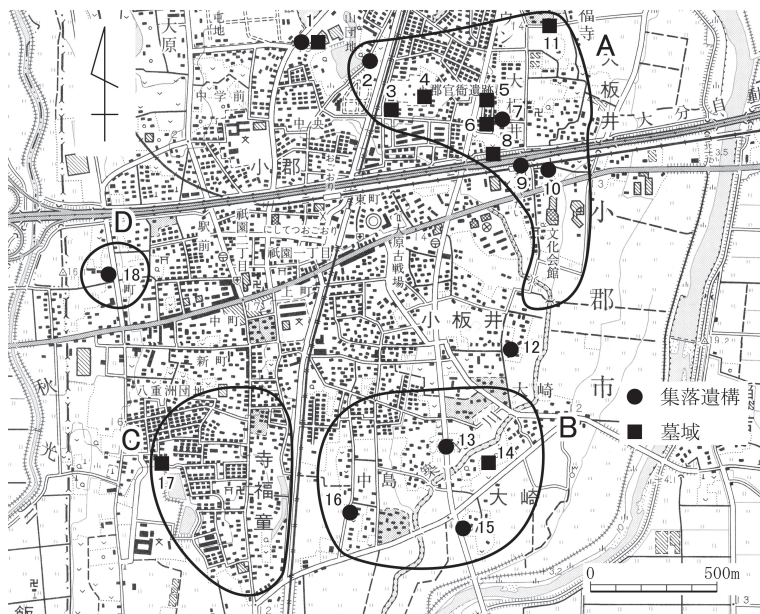
1次調査で検出した溝が弥生時代中期中頃と古く、2次調査で検出した溝・井戸は弥生時代中期後半～末頃である。

溝は人為的な埋め戻しが見られず、1次調査のD-1でのみ地形にそった南側への傾斜が確認されている。2次調査2C区SD-1は、常に水が湧き出し、北側から大量の土器が投棄されている。これらの土器の中には、丹塗り土器がみられることから、祭祀として投棄された可能性が考えられる。弥生時代中期後半～末頃より、溝に土器を大量に投棄する水に関連する祀りが指摘されており(石田 2009)、2C区SD-1もこうした水に関連する祀りの可能性が考えられる。

2次調査2A区SE-1からは、袋状口縁壺が3点出土している。最下層から破片が1点、中層より完形のもの1点、埋土中より完形に近いものが1点それぞれ出土している。弥生時代中期末～後期初頭の井戸祭祀では、丹塗土器の袋状口縁壺が集中して出土する場があることが指摘されている(久住・久住 2008)。2A区SE-1の場合、湧水点不明であり、出土状況も個体によってばらつきがあることから、井戸祭祀として投棄されたとは断定できず、使用中に廃棄した可能性も想定すべきであろう。

大崎後原遺跡は、住居などの遺構が検出されておらず、遺構密度も低い。しかし、地形的に南側に傾斜していることから、当該時期の集落は、調査区より北側に広がっていたものと考えられる。

2 小郡市中・南部における弥生時代中期の遺跡動向



1. 小郡中尾遺跡 2、2. 小郡若山遺跡 1・3・6、3. 小郡遺跡 7区、
4. 小郡遺跡、5. 大板井遺跡 I、6. 大板井遺跡 II、7. 大板井遺跡 III、
8. 大板井遺跡 VIII、9. 大板井遺跡 19、10. 大板井遺跡 22、
11. 大板井遺跡 XII、12. 小板井屋敷遺跡、13. 大崎小園遺跡、
14. 大崎遺跡、15. 大崎中ノ前遺跡 1・2、16. 大崎後原遺跡 1・2、
17. 寺福童遺跡 5、18. 小郡正尻遺跡 2・3・4

第 24 図 小郡市中・南部の弥生時代中期の遺跡分布

1) はじめに

大崎後原遺跡 2 では、小郡市域において集落域からまとまった出土例の少ない弥生時代中期後半～末頃の土器が大量に出土した。大崎後原遺跡から北側に約 2 km の所には、弥生時代中期の拠点集落と考えられている小郡・大板井遺跡群が所在する。大崎後原遺跡の性格を考察するうえでも、小郡・大板井遺跡群といった拠点集落との関係を考える必要がある。その際、地形的な選択性についても着目することとする。

弥生時代中期は、道具の技術の進歩や人口の増大により三国丘陵から広い平坦地への人の移動が想定されている(西谷 1996)。丘陵ほど水の利便性が必要でなくなったとしても、大きな河川に近い低位段丘上な

どを好んで選んだ可能性が考えられる。よって、本稿では、大崎後原遺跡の性格を位置づけるためにも、弥生時代中期段階における小郡市域中南部の遺跡の広がりについて、地形の選択性と比較しながらその動向をまとめたい。なお、時期区分は、小郡市域の弥生時代中期編年である片岡編年（片岡 1985）に概ね依拠することとし、大きく①須玖Ⅰ式段階（弥生時代中期中頃）と②須玖Ⅱ式段階（弥生時代中期後半～末頃）に区分して遺跡の動向を概観することとする。

2) 地域設定

対象遺跡は第 24 図に示したとおりである。対象遺跡は、宝満川西岸の脊振山地からなだらかにのびる低位段丘上に位置している。この低位段丘には小規模な谷が入り組んでおり、沖積平野に突き出した低位段丘や独立した低位段丘等がある。小郡市域においてこうした地形は、谷水田として利用されてきた。当時も、谷水田等水の利用がしやすかったのか、この低位段丘上やその周辺には、当該期の遺跡が存在している。この状況は、『大板井遺跡』（九州大学文学部考古学研究室編 1995）で指摘されているような遺跡群とほぼ一致する。『大板井遺跡』の区分を参照し、本稿では脊振山地からなだらかに伸びる低位段丘を以下のような地域で区分する。

- A：小郡・大板井遺跡群・・・最北端で南東側に張り出す低位段丘に所在する遺跡。
- B：大崎遺跡群・・・南側に張り出す東側の低位段丘とその付近の独立低位段丘に所在する遺跡。
- C：寺福童遺跡群・・・南側に張り出す西側から 2 番目の低位段丘に所在する遺跡。
- D：小郡正尻遺跡・・・西側に流れる秋光川に沿って広がる遺跡群。

3) 須玖Ⅰ式段階の遺跡動向



第 25 図 小郡市中・南部の須玖Ⅰ式段階の遺跡分布
（*遺跡ドットと番号は図 24 に対応）

小郡市域は、前段階の弥生時代中期初頭まで、北部の三国丘陵を中心として遺跡群の広がりがみられた。それが、弥生時代中期中頃以降、三国丘陵の遺跡数が相対的に減少・縮小し、小郡・大板井遺跡群が所在する小郡市域中部の丘陵や台地、南部の沖積平野の低位段丘へと遺跡が広がっていく。

小郡・大板井遺跡群は、弥生時代前期後半以来集落としての活動を開始しており、須玖Ⅰ式段階の弥生時代中期中頃より、集落域が飛躍的に拡大する。大板井遺跡では、集落を取り囲むように甕棺墓群が作られており、中期段階では低位段丘上だけで生活が完結している。小郡遺跡と大板井遺跡は南から入り込む浅い谷によって隔てられているものの、小郡若山遺跡からは多鈕細文鏡が、大板井遺跡では銅戈を有する遺構が検出されていることから、この地域における中核的な地位がうかがえる。

小郡・大板井遺跡群の南側には、時期が若干新相を呈する大崎遺跡群が所在する。大崎遺跡群は、大崎井牟田遺跡で縄文時代の遺構が確認されているものの、

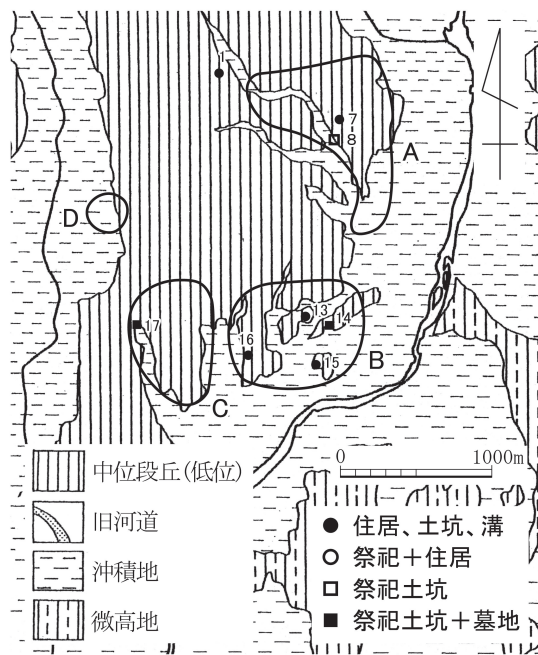
弥生時代の遺構は中期段階より確認されている。大崎遺跡では須玖Ⅱ式段階に近い時期の墓域や祭祀土壇、大崎中ノ前遺跡 1 で土壇が数基確認されていることから、大崎中ノ前遺跡で居住していた人々の墓域として大崎遺跡が存在したと考えられる。小郡・大板井遺跡群と比べると比較的に新しい段階のものが多くことから、人口増大や耕作地の拡大を求める動きの中で、小郡・大板井遺跡群で活動していた人々の一部が土地を求め、南側の低位段丘へと活動拠点を拡大した可能性が考えられる。

寺福童遺跡群では、弥生時代以来墓地として継続している。この時期は、寺福童遺跡 5 において甕棺墓を中心とした墓域が形成されている。また、低位段丘の東端に位置する寺福童遺跡 4 からは、

弥生時代中期の埋納遺構が検出されている。

寺福童遺跡群から北へ約 600 m のところに、小郡正尻遺跡が所在する。小郡正尻遺跡は、これまで概観してきた地域の遺跡と比べ、時期が若干古相を呈する。調査範囲が限られているものの、溝を中心に遺構が検出され、住居も 1 軒確認されていることから、少なくともこの時期に人々の居住がなされていたと考えられる。小郡正尻遺跡の南側約 125 m のところには、弥生時代中期初頭頃の遺構が検出された小郡野口遺跡がある。小郡正尻遺跡の主体は、須玖Ⅰ式古相段階を呈することから、小郡野口遺跡で活動していた人々が生活領域を拡大する中で、小郡正尻遺跡まで活動領域を広げた可能性が考えられる。

4) 須玖Ⅱ式段階の遺跡動向



第 26 図 小郡市中・南部の須玖Ⅱ式段階の遺跡分布
(*遺跡ドットと番号は図 24 に対応)

須玖Ⅱ式段階になると、寺福童遺跡群では引き続き墓域が継続するものの、小郡正尻遺跡において遺構の広がり確認できなくなる。また、小郡・大板井遺跡群においては、弥生時代中期末から後期初頭にかけてまとまった集落が確認されておらず遺構も以前に比べ希薄になる(片岡 2001)。

一方で、大崎遺跡群では大崎遺跡の墓域が継続するとともに、大崎中ノ前遺跡を中心に集落域が拡大する。大崎中ノ前遺跡では、住居 8 軒、掘立柱建物 6 棟、周溝状遺構 1 条、その他溝や土坑が検出されている。また、大崎中ノ前遺跡 2 の西側に所在する大崎後原遺跡では、井戸 1 基と溝 2 条が確認されている。このことから、当該期の大崎遺跡群においては、これまで概観してきた地域の遺跡とは異なり、須玖Ⅰ式段階から継続する人々の活発な活動が想定できる。

5) まとめ

かなり大まかであるが、小郡市域中・南部の弥生時代中期の遺跡動向を概観した。須玖Ⅱ式段階の大崎遺跡群は、拠点集落である小郡・大板井遺跡群が弥生時代中期末から後期初頭にかけてまとまった集落が確認されていない中で、活発期を迎えている。このことから、土地を求め人々が活動領域を広げる際、宝満川に近く、南側には広大な沖積平野が広がる大崎遺跡群は、立地として好まれ、人々の集落領域として選択された可能性が考えられよう。

当該地域の弥生時代中期編年が確立してから 25 年以上経過している。片岡編年(片岡 1985)の中でも指摘されているように、弥生時代中期末の資料は編年作成当時不足していたが、以後約 25 年間の調査成果により、資料が蓄積されてきている。今後は、大崎後原遺跡 2 の調査成果を踏まえながら、当該地域の土器編年の再考が求められよう。

< 主要参考文献 > *五十音順、報告書は割愛

- 石田智子 2009 「北部九州弥生時代中期の土器祭祀」『奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—』九州大学総合博物館
- 片岡宏二 1985 「弥生時代中期の土器編年について—特に三国丘陵の資料を中心に—」『大板井遺跡Ⅱ』小郡市教育委員会
- 片岡宏二 1996 「第三章第二節四 農耕村落の展開」『小郡市史第一巻 通史編』小郡市史編集委員会
- 片岡宏二 2001 「20 大板井遺跡」『小郡市史第四巻 資料編 原始・古代』小郡市史編集委員会
- 九州大学文学部考古学研究室編 1995 『大板井遺跡』小郡市史編集委員会
- 久住愛子・久住猛雄 2008 「九州Ⅰ(福岡県)—福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について—」『井戸再考』第 57 回埋蔵文化財研究報告 埋蔵文化財研究会
- 西谷正 1996 「第三章第三節 小国の形成と東アジア」『小郡市史第一巻 通史編』小郡市史編集委員会

表1 大崎後原遺跡2 出土土器観察表

【凡例】 以下の省略名称を使用する。

- ・器種=土師器:土、弥生土器:弥
- ・分量、状態=口:口径、器:器高、底:底径、口縁部:口、頸部:頸、胴部:胴、体部:体、頂部:頂、杯部:杯、脚部:脚、裾部:裾
- ・胎土=精良:0.5mm未満、微砂:0.5mm以上~1.0mm未満、細砂:1.0mm以上~2.0mm未満、砂礫:2.0mm以上
- ・鉱物=石英:石、長石:長、雲母:雲、角閃石:角、赤色粒子:赤
- ・色調=農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』2002年度版

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	分量cm (復元値)	色調	胎土	焼 成	成形・調整技法	残存率	備考
7-1		A区SK1	土 甕	口:(27.8) 器:8.7	外:にぶい黄橙 (10YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ナデ、頸ハケメ後ナデ、 胴ハケメ 内:口ナデ、頸ハケメ・ナデ、胴 ヘラ削り	口~胴 上約1/4	内外面の口~頸にスス付 着
7-2		A区SK1	土 甕か 甕	器:11.3	外:明赤褐 (5YR5/6) 内:にぶい黄橙 (10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:把押さえ、胴工具ナデ 内:ヘラ削り	把手約 1/1	
7-3		A区SK3	土 甕	口:(11.4) 器:7.9	内外:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、胴ハケメ 内:口ヨコナデ、胴押さえ・ナデ	口~胴 上約1/4	外面胴にコゲあり
7-4		A区SE1	弥 甕	口:(18.0) 器:3.7	外:にぶい黄橙 (10YR6/4) 内:褐灰(10YR5/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:頸ハケメ 内:口工具痕、頸押さえ	口~頸 約1/6	内面にスス付着
7-5		A区SE1	弥 壺	底:5.2	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:にぶい黄橙 (10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:胴下ヘラミガキ 内:頸絞り、胴ハケメ後ナデ・押 さえ	頸~胴 上約1/4 胴下~ 底約1/1	内面胴にスス付着
7-6		A区SE1	弥 壺	口:7.05	外:明赤褐 (5YR5/6) 内:にぶい黄 (2.5Y6/3)	微砂:石、長	良	外:口ヨコナデ、頸~胴ヘラミガ キ 内:口ヨコナデ、頸絞り、胴押さ え	口~頸 約4/5 頸~胴 約1/5	精製土器 外面に全面丹 内面胴下にコゲあり
7-7	8	A区SE1	弥 壺	口:7.9 底:6.2 器:20.1	内外:にぶい橙 (7.5YR7/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:頸~胴ヘラ磨き 内:口ヨコナデ、頸絞り痕、胴押 さえ+ナデ	約1/1	外面に黒斑 内面胴にスス付着
7-8		A区SE2	弥 甕	口:(19.0) 器:6.7	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:黄灰(2.5Y4/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲	良	外:口ヨコナデ、胴ハケメ 内:口~胴ハケメ	口~胴 上約1/5	
7-9		A区SE2	弥 壺	底:9.0 器:7.8	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:黄灰(2.5Y4/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:ハケメ 内:底押さえ	胴下~ 底約1/1	内面にスス付着
7-10		A区SE2	弥 鉢	口:(16.8) 器:4.9	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	細砂:石・長 微砂:雲・赤	良	外:口ナデ、胴押さえ 内:口~胴ナデ	口~胴 上約 1/10	外面に黒斑
7-11		A区SD1	弥 甕	口:(27.0) 器:6.0	外:にぶい黄橙 (10YR6/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	細砂:石、長、 雲 微砂:赤	良好	外:口~頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口~頸ヨコナデ、胴ハケメ	口~胴 上約1/4	
7-12		A区SD1	弥 甕	口:(39.5) 器:12.3	内外:にぶい褐 (7.5YR6/4)	砂礫:石 細砂:長、雲、 赤	良	外:口~頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口~頸ヨコナデ、胴押さえ・ 強いナデ	口~胴 上約1/4	
7-13		A区SD1	弥 壺	口:(16.0) 器:4.5	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:にぶい黄橙 (10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口~頸ナデ、胴ハケメ 内:口~頸ナデ、胴押さえ・ナデ	口~胴 上約1/4	口に2個1対の穿孔1組
7-14	8	A区SD1	弥 壺	口:9.2 底:8.6 器:24.3	外:赤褐(2.5YR4/8) 内:灰白(10YR8/2)	細砂:石、長 微砂:雲	良	外:口~頸ヘラミガキ、胴ハケメ 内:口ヨコナデ、頸押さえ・絞り、 胴ナデ	ほぼ完 形	精製土器 内面の胴部にスス付着
11-1		B区SD1	土 甕	口:(15.6) 器:6.2	外:橙(5YR6/6) 内:灰黄(2.5Y7/2)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良好	外:口~頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口ハケメ、頸部ナデ、胴ヘラ 削り	口~胴 上約1/4	
11-2		B区SD1	土 器台	器:6.8	内外:にぶい橙 (7.5YR7/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:杯ハケメ、脚ヘラミガキ・ハ ケメ 内:杯ヘラ磨き、胴ハケメ	杯下~ 脚約1/1	
11-3	9	B区SD1	須 坏蓋	口:12.3 器:4.05	外:黒(10YR1.7/1) 内:褐灰(10YR4/1)	微砂	良	外:回転ヘラ削り、回転ヨコナデ 内:ナデ	口~底 約4/5	外面にヘラ記号
17-1		C区SD1 上層	土 甕	口:(15.8) 器:5.1	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口~頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口~胴ハケメ、胴ヘラ削り	口~胴 上約1/2	外面頸にスス付着
17-2	9	C区SD1 上層	土 甕	口:(16.4) 器:8.5	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:橙(7.5YR6/6)	細砂:石、長 微砂:赤	良	外:胴ハケメ 内:頸ハケメ、胴ヘラ削り	口~胴 上約1/2	
17-3		C区SD1 上層	土 甕	口:(14.4) 器:8.0	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	細砂:石、長 微砂:赤	良	外:口~頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口~胴ハケメ	口~胴 上約1/3	外面の胴にコゲあり
17-4		C区SD1 上層	土 甕	口:17.6 器:6.4	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:橙(7.5YR7/6)	細砂:石、長 微砂:赤	良	外:頸ハケメ、胴ハケメ後ナデ 内:頸ハケメ	口~胴 上約2/3	

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼 成	成形・調整技法	残存率	備考
17-5		C区SD1 上層	土 甕	底:4.6 器:24.95	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:橙(5YR6/6)	砂礫:石、長 微砂:赤、角	良	外:ハケメ・タタキ 内:ハケメ	頸～胴 上約1/3 胴下～ 底約1/1	底付近に穿孔あり
17-6	9	C区SD1 上層	土 甕	底:5.1 器:27.3	外:浅黄(2.5Y7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	砂礫:長 細砂:石 微砂:赤	良好	外:タタキ後ハケメ後ナデ 内:ハケメ	頸～底 約1/1	外面はスス付着
17-7		C区SD1 上層	土 甕	口:(15.4) 器:23.2	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ハケメ 内:ハケメ	口～胴 下約1/4	外面頸直下の胴に帯状の スス付着
17-8	9	C区SD1 上層	土 甕	口:26.2 底:6.0	外:橙(7.5YR7/6) 内:浅黄橙(10YR8/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良好	外:ハケメ 内:ハケメ	口約7/8 頸～胴 上約1/2 胴下～ 底約1/1	外面胴中に黒斑2箇所あり
17-9	9	C区SD1 上層	土 甕	口:25.4 底:4.8 器:32.2	外:にぶい黄橙 (10YR7/2) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	砂礫:石 細砂:長、雲、 赤	良好	外:口ハケメ後押さえ、胴タタキ 後ハケメ 内:ハケメ、頸ハケメ後押さえ	口～底 約1/3	
18-1	9	C区SD1 上層	土 壺	口:13.3 器:7.7	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:褐灰(10YR4/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、頸～胴ヘラミガ キ 内:口ヨコナデ、頸上ヘラミガ	口～胴 上約1/1	
18-2		C区SD1 上層	土 壺	口:23.6 器:8.0	外:にぶい黄橙 (10YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、頸～胴ハケメ 内:頸ハケメ、胴押さえ	口～胴 上約2/3	
18-3		C区SD1 上層	土 高杯	裾:9.5 器:7.1	外:浅黄色(2.5Y7/3) 内:にぶい黄(2.5Y6/3)	微砂:石、長、 雲、赤	良	外:脚ヘラミガキ・ヨコナデ 内:脚ヨコナデ	脚～裾 約3/4	
18-4		C区SD1 上層	土 高杯	裾:12.2 器:7.2	外:にぶい黄橙 (10YR7/4) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	砂礫:石 微砂:長、雲、 赤	良	外:脚ヘラミガキ 内:脚ハケメ	脚～裾 約1/1	裾の穿孔は3個残存
18-5	9	C区SD1 上層	土 高杯	裾:11.9 器:9.6	外:にぶい黄褐 (10YR5/4) 内:にぶい褐(7.5YR5/4)	砂礫:石 微砂:長、赤	良	外:杯ハケメ、脚マツ 内:杯ハケメ、脚ヘラ削り・ハケ メ	杯～裾 約5/6	裾の穿孔は2個残存
18-6		C区SD1 上層	土 器台	口:10.2 裾:10.9 器:8.6	外:橙(5YR6/6) 内:橙(5YR6/8)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:杯ハケメ・ヘラミガキ、脚ヘ ラミガキ 内:杯ナデ、脚ハケメ	口～杯 約1/2 脚～裾 約5/6	脚の穿孔は3個
18-7	9	C区SD1 上層	土 器台	口:8.2 裾:10.1 器:7.0	内外:にぶい橙 (7.5YR6/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:杯マツ、脚ナデ 内:杯マツ、脚ハケメ	口～杯 約1/1 脚～裾 約1/2	
18-8		C区SD1 上層	土 鉢	口:25.9 底:2.4 器:10.3	外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:胴上ヨコナデ、胴下タタキ 内:胴上ナデ、胴下ハケメ後ナ デ	口～底 約1/1	外面にスス付着 底の穿孔は焼成前
18-9	9	C区SD1 上層	土 坏	口:(12.2) 底:1.9 器:4.9	外:にぶい黄橙 (10YR7/4) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:マツ 内:マツ	口～胴 上約1/5 胴下～ 底約1/1	底の外面にスス付着
18-10	9	C区SD1 上層	土 坏	口:12.6 器:4.7	外:橙(5YR6/6) 内:明赤褐(5YR5/6)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:マツ 内:ヨコナデ	口～底 約4/5	外面にヘラ記号か?
18-11	9	C区SD1 上層	土 製塩 土器	口:(6.4) 底:1.2 器:13.0	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:ヘラ削り 内:胴上押さえ、胴下ヘラ削り	口～底 約3/4	内面下半にスス付着
18-12	9	C区SD1 上層	土 支脚	器:14.6	外:橙(2.5YR7/8)	砂礫:石 微砂:長、赤	良	指押さえ	約3/4	頂と底が一部欠損
19-1		C区SD1 中・下層	弥 甕	口:(23.8) 器:10.05	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:にぶい黄橙 (10YR7/2)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、胴ハケメ 内:口ヨコナデ、胴マツ	口～胴 上約1/5	
19-2		C区SD1 中・下層	弥 甕	口:(28.3) 器:7.3	外:にぶい赤褐(5YR5/3) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、胴ハケメ 内:マツ	口～胴 上約1/6	外面にコゲあり
19-3		C区SD1 中・下層	弥 甕	口:(20.8) 器:7.6	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂:石 微砂:長、雲	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～頸刻目、胴ハケメ	口～胴 上約1/4	外面にコゲあり 内面口に刻目あり
19-4		C区SD1 中・下層	弥 甕	口:(37.0) 器:19.2	外:にぶい橙(5YR7/4) 内:暗灰黄(2.5Y5/2)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良好	外:口～頸マツ、胴ハケメ 内:ハケメ	口～胴 上約1/8	
19-5	10	C区SD1 中・下層	弥 甕	口:30.5 器:15.6	外:にぶい黄橙 (10YR6/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	砂礫:石、長、 雲 微砂:赤	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ・ 方形突帯 内:口～頸ハケメ、胴ハケメ後 ナデ	口～胴 上約1/5	外面胴に方形突帯1条

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼 成	成形・調整技法	残存率	備考
19-6		C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:(20.8) 器:10.0	外:にぶい黄橙 (10YR7/2) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ	口～胴 上約1/4	内面口に凹み1箇所
19-7	10	C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:15.4 器:15.0	外:灰黄(2.5Y7/2) 内:暗灰黄(2.5Y5/2)	砂礫:石、長 微砂:雲	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～頸ハケメ、胴押さえ	口約2/3 頸約1/1 胴約1/2	外面口～胴上にスス付着
19-8	10	C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:17.2 底:9.0 器:18.1	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:にぶい黄橙 (10YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤、 角	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～胴ハケメ、胴下押さえ	口約3/4 頸～底 約1/1	外面口～胴上に黒斑あり 内面口～胴上に丹あり
20-1	10	C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:26.5 底:9.2 器:29.3	内外:橙(5YR6/6)	細砂:石、長、 雲	良好	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～頸ヨコナデ、胴ナデ	口～底 約3/4	外面全面にスス付着 内面胴下～底にスス付着
20-2	10	C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:26.7 底:9.6 器:33.1	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:浅黄橙(10YR8/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～胴ハケメ、底押さえ	ほぼ完 形 (胴部 のみ約 5/6)	外面胴上にスス付着 内面胴上～底部スス付着
20-3	10	C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:30.2 底:10.0 器:33.25	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/3)	砂礫:石、赤 細砂:長	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～胴ハケメ、底押さえ	口約4/5 頸～底 完形	外面全面にスス付着 内面底にスス付着
20-4		C区SD1 中・下層	弥. 甕	口:(31.8) 器:5.0	外:赤(10YR4/6) 内:赤褐(2.5YR4/6)	砂礫:石 微砂:長	良	外:胴上M字突帯1条 内:口暗文、胴工具ナデ	口～胴 上約1/4	精製土器(全面丹塗り) 口縁内面の暗文は直線
20-5		C区SD1 中・下層	弥. 甕	底:11.0 器:10.2	外:灰黄褐(10YR6/2) 内:にぶい黄橙 (10YR7/2)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:胴ハケメ 内:胴押さえ	胴下～ 底約1/1	外面にスス付着 内面の底部にスス付着 内面底部に放射線状の工 具痕
20-6	10	C区SD1 中・下層	弥. 甕	底:10.0 器:18.3	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/3)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤、 角	良	外:胴ハケメ 内:胴ナデ、底押さえ	胴約1/2 底約1/1	
21-1		C区SD1 中・下層	弥. 壺	口:(30.2) 器:9.75	外:橙(7.5YR7/6) 内:橙(5YR7/8)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:頸ハケメ・ナデ 内:口～頸ナデ	口～頸 約1/4	
21-2	10	C区SD1 中・下層	弥. 壺	器:11.05	外:明赤褐(2.5YR5/6) 内:にぶい褐(7.5YR6/5)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:胴ナデ・方形突帯1条・M字 突帯1条 内:胴マメツ	胴上約 1/6	精製土器 外面全面丹塗り 内面にスス付着
21-3		C区SD1 中・下層	弥. 壺	器:12.7	外:赤灰(2.5YR5/1) 内:灰黄褐(10YR6/2)	砂礫:石 微砂:長、雲	良好	外:胴ナデ・断面三角形突帯2 条・ハケメ 内:胴ハケメ・押さえ	胴上約 1/6	精製土器 外面全面丹塗り 外面胴下にスス付着
21-4	10	C区SD1 中・下層	弥. 壺	底:7.3 器:15.3	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:灰黄(2.5Y7/2)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:胴ハケメ 内:胴ハケメ・押さえ、底工具ナ デ	胴～底 約1/1	外面胴～底に黒斑あり 内面の胴部にスス付着
21-5		C区SD1 中・下層	弥. 壺	底:10.6 器:4.6	内外:浅黄橙(10YR8/3)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:胴ハケメ後ナデ 内:胴ハケメ・押さえ	胴下～ 底約4/5	外面底にスス付着
21-6		C区SD1 中・下層	弥. 壺	底:12.6 器:10.2	外:にぶい黄橙 (10YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:胴ハケメ 内:胴ナデ、底押さえ	胴下約 1/2 底約1/1	
21-7	10	C区SD1 中・下層	弥. 壺	口:13.4 底:7.6 器:13.3	内外:にぶい橙 (7.5YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口～頸ナデ、胴ハケメ 内:口～頸ナデ、胴指押さえ	口～胴 下約1/2 胴下～ 底約1/1	外面は胴上～底にスス付 着 内面は胴にスス付着 口に穿孔1個残存
21-8	10	C区SD1 中・下層	弥. 壺	口:14.7 底:7.0 器:13.8	外:赤(10YR5/6) 内:にぶい黄(2.5Y6/4)	砂礫:石 微砂:長 精良:赤	良好	外:胴上ヘラミガキ、胴下ハケメ 内:口ヘラミガキ、頸ヨコナデ、 胴押さえ・ナデ・工具ナデ	口～底 約4/5	精製土器 外面全面、内面口～胴上に 丹塗り 口に2個1対の穿孔2組
21-9	10	C区SD1 中・下層	弥. 壺	口:14.7 底:9.2 器:13.65	外:淡黄(2.5Y8/3) 内:にぶい褐(7.5YR6/3)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良好	外:胴ハケメ 内:頸～胴ナデ、胴ハケメ・押さ え・ナデ	口約6/7 頸～底 完形	外面全面、内面口～胴上に 丹塗り 底に穿孔あり、 頸の穿孔は2個1対 外面底にスス付着
21-10		C区SD1 中・下層	弥. 壺	口:(21.2) 器:7.35	外:明赤褐(2.5YR5/6) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石 微砂:長、雲、 赤	良	外:口～胴ヨコナデ・ハケメ 内:口～胴ヨコナデ	口～胴 上約1/4	外面全面、内面口丹塗り
21-11	10	C区SD1 中・下層	弥. 蓋	口:(16.2) 器:2.2	外:赤褐(2.5YR3/6) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	細砂:石、長 微砂:雲、赤	良	外:マメツ 内:ヘラミガキ後ナデ	口～頂 約1/2	外面全面丹塗り 穿孔は2個1対が1組
21-12		C区SD1 中・下層	弥. 蓋	口:14.2 器:3.0	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:ナデ 内:マメツ	口～頂 約3/4	外面全面丹塗り 穿孔は2個1対が1組
22-1	10	C区SD1 中・下層	弥. 高杯	口:25.1 器:14.7	外:浅黄橙(7.5YR8/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、脚ヘラミガキ 内:口ヨコナデ、脚紋り	口約1/3 杯～脚 約1/1	外面全面、内面杯丹塗り 円盤充填方式
22-2	10	C区SD1 中・下層	弥. 高杯	口:26.0 器:18.4	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:灰白(2.5Y8/2)	細砂:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口暗文、脚ヘラミガキ 内:坏ヘラミガキ、脚紋り	口～脚 約1/1	外面全面、内面杯丹塗り 円盤充填方式 外面口暗文は直線
22-3	11	C区SD1 中・下層	弥. 高杯	口:31.0 器:18.3	外:にぶい褐(7.5YR6/3) 内:にぶい橙(7.5YR7/3)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ナデ、坏ハケメ、脚ヘラミ ガキ 内:口ヨコナデ、坏ヘラミガキ、 脚紋り	口約2/3 杯～脚 約1/1	外面全面、内面杯丹塗り 外面口の暗文は斜線

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
22-4		C区SD1 中・下層	弥. 高杯	口:(19.2) 器:8.4	外:にぶい黄橙 (10YR7/2) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:坏ハケメ 内:坏ハケメ	口~杯 約1/4	
22-5	11	C区SD1 中・下層	弥. 鉢	口:20.0 底:7.2 器:11.1	外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ロナデ、胴ハケメ 内:胴押さえ	口~底 約1/2	
22-6	11	C区SD1 中・下層	弥. 鉢	口:17.35 底:5.7 器:9.8	内外:にぶい黄橙 (10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ロナデ、胴ハケメ 内:ロナデ	口~底 約4/5	外面胴上~底に黒斑
22-7		C区SD1 中・下層	弥. 鉢	口:16.2 底:5.6 器:9.85	外:灰白(2.5Y7/1) 内:灰黄(2.5Y6/2)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:胴上ハケメ 内:胴上ハケメ、底押さえ	口~頸 小片 胴~底 約1/2	外面頸~胴に黒斑
22-8		C区SD1 中・下層	弥. 手捏	口:9.2 底:3.8 器:4.7	外:灰褐(7.5YR5/2) 内:褐灰(7.5YR5/1)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:ロナデ、胴押さえ 内:ロナデ、胴押さえ	口~底 約1/2	内面にスス附着
22-9	11	C区SD1 中・下層	弥. 手捏	口:11.0 底:6.5 器:7.8	外:にぶい褐(7.5YR5/4) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:ロナデ、胴押さえ、底ハケメ 内:ロナデ、胴ハケメ、底押 え・ナデ	完形	外面に黒斑 内外面にスス附着
22-10	11	C区SD1 中・下層	土. 支脚	裾:7.0 器:7.4	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:押さえ 内:絞り	体~裾 約1/1	
22-11	11	C区SD1 中・下層	土. 支脚	裾:10.7 器:9.8	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:押さえ 内:マメツ	口~裾 約3/4	
22-12	11	C区SD1 中・下層	土. 支脚	裾:13.1 器:7.2	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:明黄褐(10YR6/6)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:押さえ 内:絞り	体~裾 約3/4	

表2 大崎後原遺跡2 出土石器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	石材	計測値				備考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
23-1	11	C区SD1下層	石庖丁	粘板岩	7.9	3.9	0.65		刃部に刃こぼれ、両面磨ぎ、穿孔部2個残存、内1個は一部欠損
23-2	11	C区SD1中層	砥石	粘板岩	13.5	6.8	4.3		砥面4面
23-3	11	C区SD1中層	砥石	頁岩	13.2	11.1	6.1		砥面3面

表3 大崎後原遺跡2 出土木器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	種別	計測値 (単位: cm)					木取り	備考
				長さ	径	幅	厚さ	杭先・先端長		
8-1	8	A区SE2	杭	36.8	2.6	—	—	5	心持材	
8-2	8	A区SE2	杭	83.1	9	—	—	—	心持材	杭先欠損、炭化处理による焼きしめ
8-3	8	A区SE2	蹴放し	86.3	—	14.6	3.8	—	板目材	抉った痕が2ヶ所あり

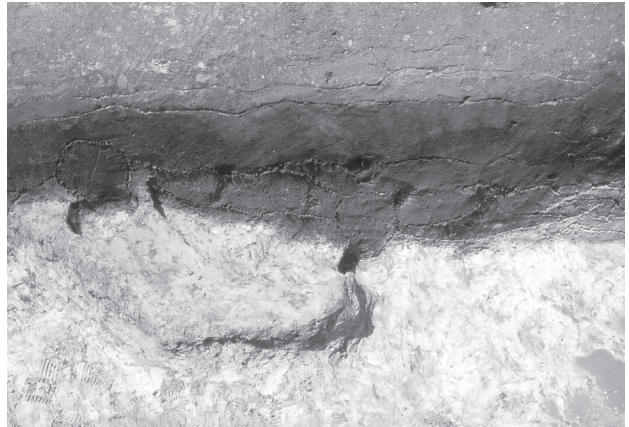
図版1



2A区 全景 (西側から)



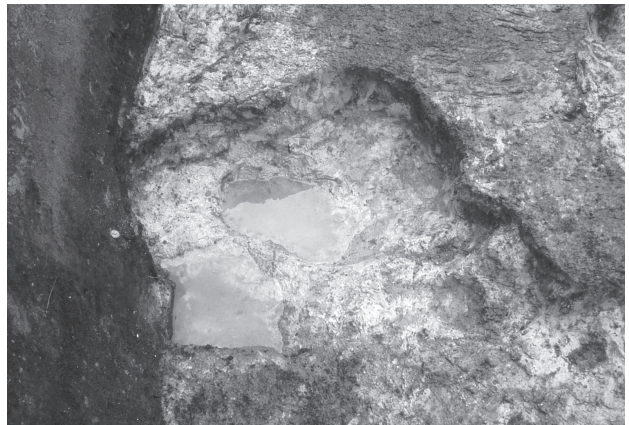
2A区 SK-1 土層 (西側から)



2A区 SK-2 土層・完掘 (南側から)



2A区 SK-1 完掘 (南側から)



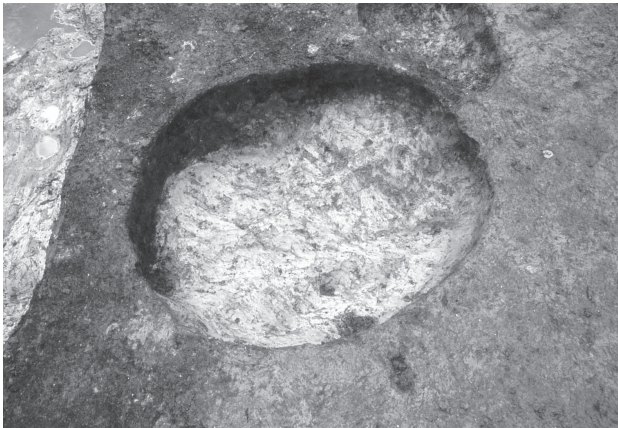
2A区 SK-3 完掘 (東側から)



2A区 SK-4 土層 (東側から)



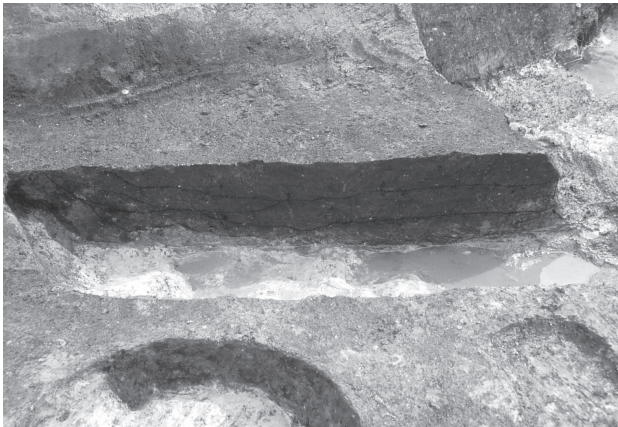
2A区 SE-1 土層 (北東側から)



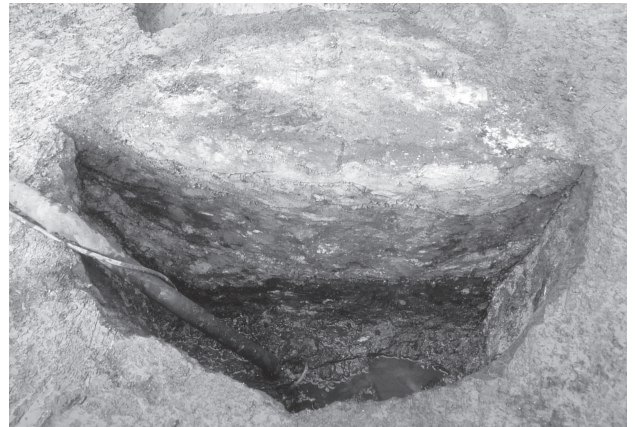
2A区 SK-4 完掘 (東側から)



2A区 SE-1 完掘 (北東側から)



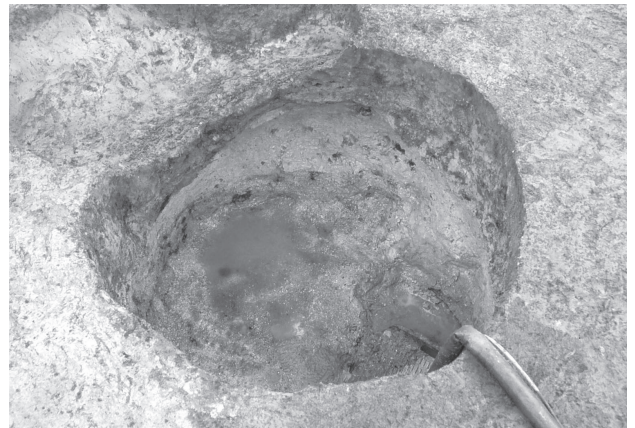
2A区 SK-5 土層 (北側から)



2A区 SE-2 土層 (西側から)



2A区 SK-5 完掘 (西側から)

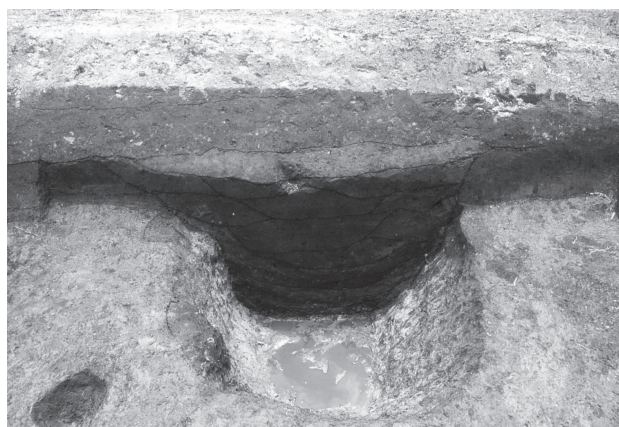


2A区 SE-2 完掘 (西側から)

図版3



2A区 SE-2 下層・建築材（西側から）



2A区 SE-3 土層（西側から）



2A区 SD-1 土層（南側から）



2A区 SD-1 完掘（北側から）



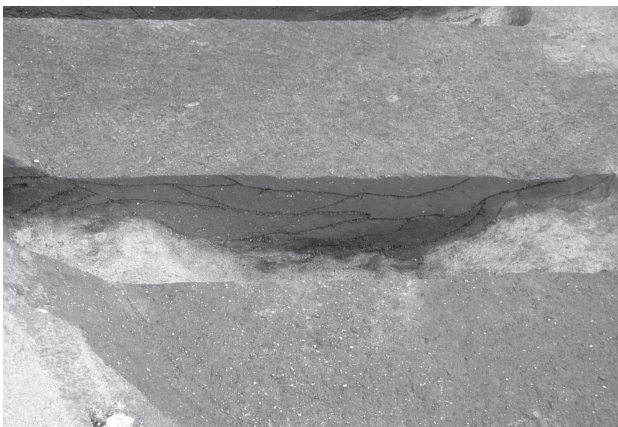
2B区 全景(南側から)



2B区 SD-1 A-A' 土層(南西側から)



2B区 SD-1 C-C' 土層(南西側から)



2B区 SD-1 B-B' 土層(南西側から)

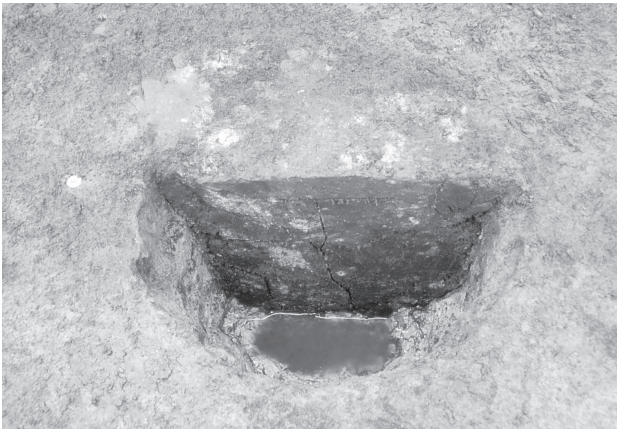


2B区 SD-1 完掘(西側から)

図版5



2C区 全景(北側から)



2C区 SB-1 P1 土層(南側から)



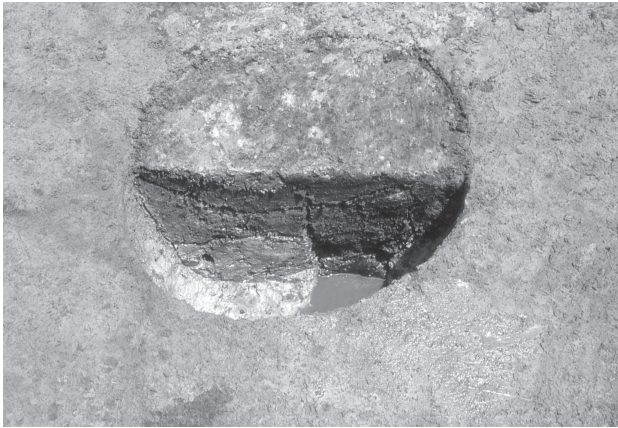
2C区 SB-1 P3 土層(南側から)



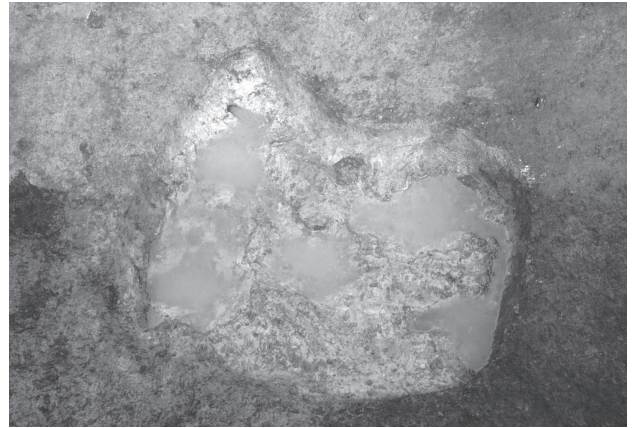
2C区 SB-1 P2 土層(南側から)



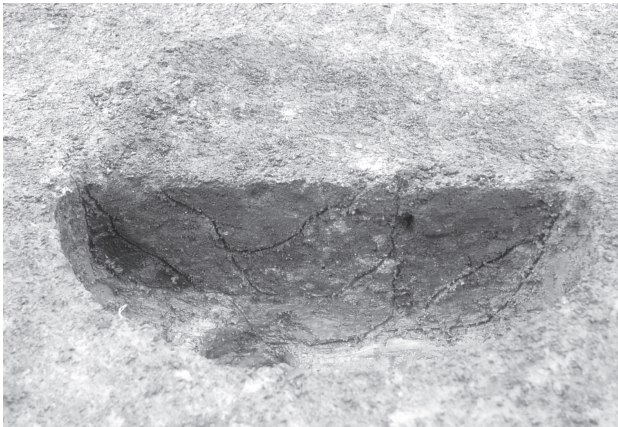
2C区 SB-1 P4 土層(南側から)



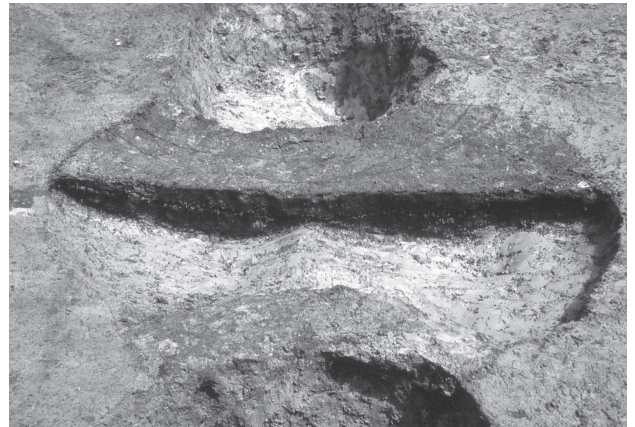
2C区 SB-1 P5 土層 (南側から)



2C区 SK-1 完掘 (西側から)



2C区 SB-1 P6 土層 (南側から)



2C区 SK-2 土層 (北側から)



2C区 SB-1 P7 土層 (南側から)



2C区 SK-2 完掘 (北側から)



2C区 SB-1 全景 (西側から)



2C区 SE-1 土層・完掘 (北側から)

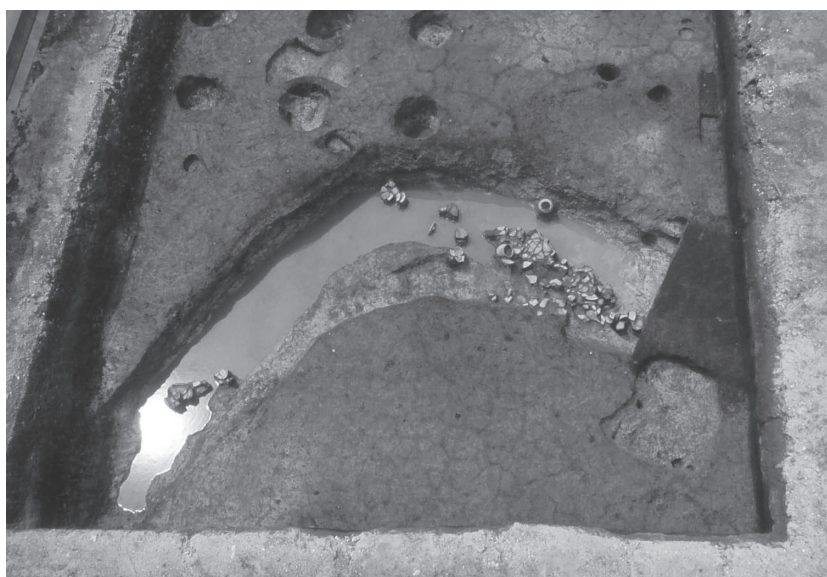
図版7



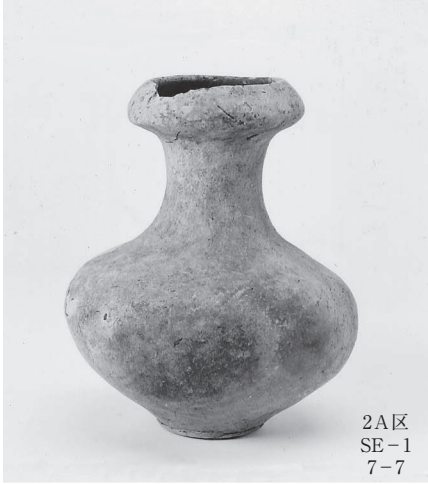
2C区 SD-1 A-A' 土層 (東側から)



2C区 SD-1 B-B' 土層 (東側から)



2C区 SD-1 全景 (北側から)



2A区
SE-1
7-7



2A区
SD-1
7-14



2A区
SE-2
8-1



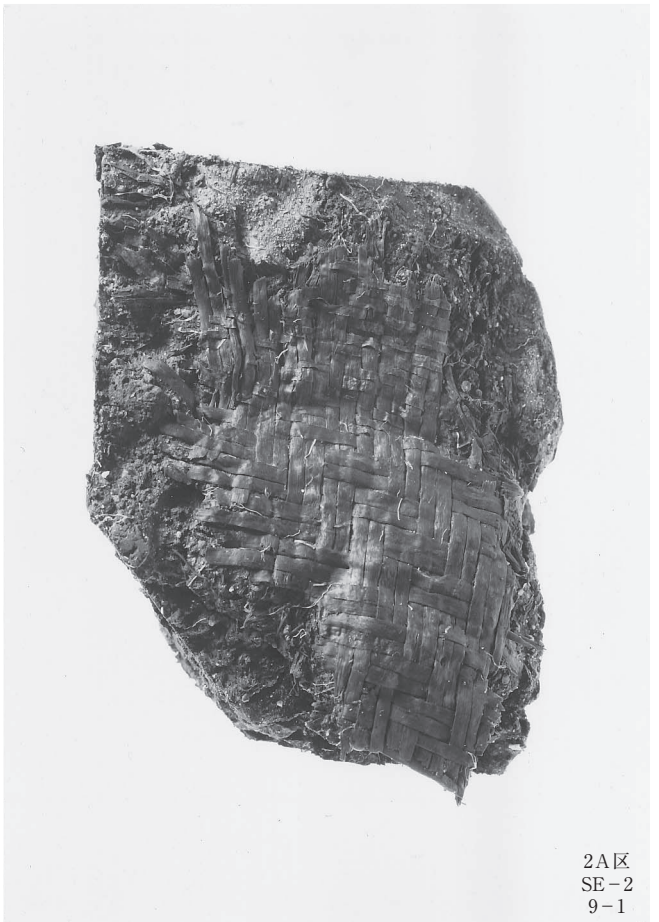
2A区
SE-2
8-2



2A区
SE-2
8-3表

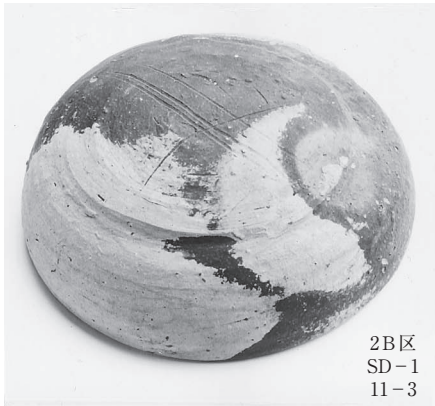


2A区
SE-2
8-3裏



2A区
SE-2
9-1

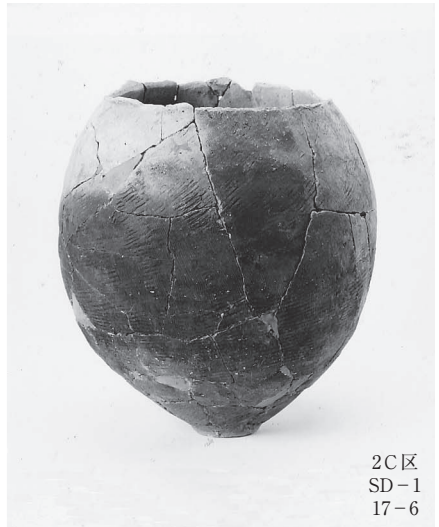
图版9



2B区
SD-1
11-3



2C区
SD-1
17-2



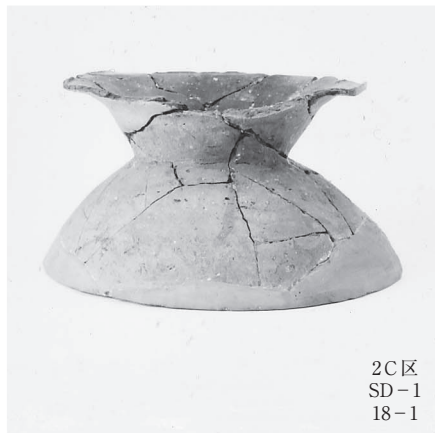
2C区
SD-1
17-6



2C区
SD-1
17-8



2C区
SD-1
17-9



2C区
SD-1
18-1



2C区
SD-1
18-5



2C区
SD-1
18-7



2C区
SD-1
18-9



2C区
SD-1
18-10



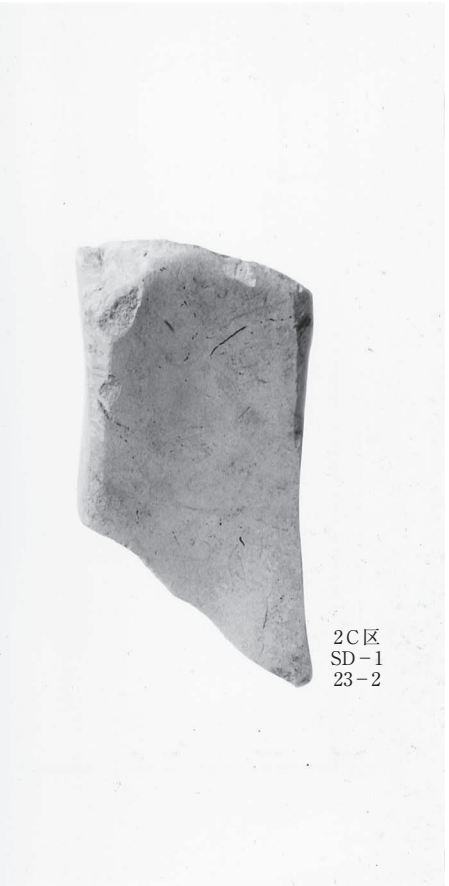
2C区
SD-1
18-11



2C区
SD-1
18-12



图版 11



報告書抄録								
ふりがな	おおさきうしろばるいせき2							
書名	大崎後原遺跡2							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第256集							
編著者名	坂井 貴志・西江 幸子							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 TEL 0942-75-7555							
発行年月日	平成23年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
おおさき うしろばる 大崎後原 いせき 遺跡2	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 小郡地内	40216		33° 23′ 10″	130° 33′ 14″	2009.7.6) 2009.8.18	190 m ²	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大崎後原 遺跡2 A	集落	弥生時代中期 後半～末 古墳時代後期		土坑 井戸 溝		弥生土器 土師器 木器 編組品		
大崎後原 遺跡2 B	集落	古墳時代末		土坑 溝		土師器 須恵器		
大崎後原 遺跡2 C	集落	弥生時代中期 後半～末 古墳時代初頭 ～前期		掘立柱建物跡 土坑 井戸 溝		弥生土器 土師器 石器		
<p>大崎後原遺跡2は、小郡市を縦断する宝満川西岸の低台地縁辺部、標高11m前後に立地する。調査では弥生時代中期後半から末頃にかけての井戸や、土器などが大量に廃棄された溝など良好な資料を得ることができた。本遺跡の中心となる弥生時代中期後半から末頃にかけては、拠点集落である小郡・大板井遺跡群が北に約1.6kmの所にあることから、遺跡の立地的にも生活域の拡大の中で派生してできた集落として発展した一部が、今回の調査で得られたと考えられよう。</p>								

大崎後原遺跡2

小郡市文化財調査報告書第256集

平成23年3月31日

発行 小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡255-1

出版 片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園1-8-15

